



千葉大学医学部同窓会報 第189号 題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るのほな同窓会長)

編集発行者 千葉大学医学部 るのほな同窓会報編集部 〒260-8670 千葉市中央区玄鼻1-8-1 千葉大学医学部内 るのほな同窓会 電話 (043) 202-3750 FAX (043) 202-3753 e-mail : info@inohana.jp HP : https://www.inohana.jp/



令和4年度 るのほな同窓会総会開催

令和4年度るのほな同窓会総会が令和4年6月11日(土)午後3時よりステーションコンファレンス東京で会場とZoom利用によるWebのハイブリッドで開催された。



吉原俊雄会長の司会により開会となり、会議に先立ち物故者83名の冥福を祈り黙祷を捧げた。吉原会長の挨拶の後、各議事について白澤浩副会長、安西尚彦理事より説明があり、メモリアル事業では栗原正利副会長より旧医学部本館記録DVDの完成について説明、視聴があり、議事はすべて審議・了承された(議事要旨は34面に掲載)。

総会に引き続き令和4年度るのほな同窓会賞社会貢献賞の表彰式が行われ、特別顧問に就任された松原久裕千葉大学大学院医学研究院院長・医学部長、横手幸太郎千葉大学医学部附属病院長より挨拶があった。続いて南野徹氏による特別講演「老化細胞を標的とした抗老化治療の開発」、黒川友哉氏による若手スピーチ「千葉大学↓行政での経験から何を還元するか」、矢田部沙羅氏による学生スピーチ「線維芽細胞由来液性因子によるシンドビスウイルスの腫瘍融解抑制」が行われた(講演内容は次号190号に掲載)。

太郎(昭63)、大川玲子(昭47)、伊藤達雄(昭42)、石川詔雄(昭47)、諏訪敏一(昭43)

二列目：齊藤光江(昭59)、石場俊太郎(昭45)、島田英昭(昭59)、中村真人(昭54)、宮本恒彦(昭54)、栗原正利(昭54)、白澤浩(昭57)、ピアス洋子(昭57)、安西尚彦(平2)

三列目：五十嵐正喜(平7)、勝野達郎(平2)、高橋正志

「千葉大学医学部旧本館・85年の記憶」DVDが完成。昭和11年に竣工、設計者達の熱い思いの詰まった病院建築。千葉医学の伝統が刻まれ、多くの生と死を見届けてきた旧病院・旧本館。その歴史を後世に残すため、同窓会とドキュメンタリー制作のスタッフ協力のもと1年以上の歳月をかけて作られました。制作過程で千葉県、千葉市にかけがえのない歴史的建造物としての価値も見直され、同窓全員が共有したい記録映画となりました。

パンフレット・振込用紙を同封いたします。

るのほな同窓会ホームページに掲載
(<https://inohana.jp/hq/?p=5026>)

千葉大学医学部旧本館 85年の記憶

後列：岡本和久(平2)、横山真隆(平15)、甲賀かをり(平8)、諏訪園靖(平6)、菱木知郎(平5)、横須賀忠(平5)、黒川友哉(平23)、小西孝明(平25)、佐藤潤也(医3) 他に、高橋宏和(平11)、南野徹(平元) が参加し計38名となった。(敬称略)

るのほな同窓会への寄附

故船曳 甫先生(専25) 二遺族 船曳美千代様 十五万円 ありがとうございます。

第27回(2022年度) るのほな同窓会賞 受賞者決定

社会貢献賞

大川 玲子 (NPO法人千葉性暴力被害支援センターちさと理事長、昭47年卒) 「性暴力被害者へのワンストップサービスセンター」の設立と運営

紙面紹介

総会開催	卒業祝辞	3・5
就任挨拶	医学部歴史年表	4
人事異動	叙勲感想	13
地区るのほな会報	最終講義	14
最新講義	研修プログラム	16
研修医だより	追悼文	18
追悼文	タツチパネル	19
学内情報	著書紹介	20
著書紹介	欧州医学史巡り	23
雑文雑談	議事要旨	24
議事要旨	編集後記	28
編集後記		30
		31
		34

令和3年度千葉大学医学部

卒業証書伝達式・祝辞

令和4年3月23日(水)

なのはな同窓会長 吉原 俊雄(昭53)



千葉大学なのはな同窓会
会員を代表してお祝いを述
べさせていただきます。

皆さん、本日はご卒業お
めでとうございます。また、
ご家族の皆さまにとりまし
ても、待ち望んだ晴れがまし
い日と存じます。

千葉大学医学部での教育
課程をすべて修め、まさに
医師としてのスタートライ
ンを迎えたこととなります。
また本学の教育スタッフ、
病院実習でご協力いただい
た多くの方々に対しては感
謝の念に堪えません。皆さ
んが、この「なのはなの地」

祝 叙 勲

令和4年 春の叙勲

瑞宝小綬章

竜 崇正(昭43)

南 智仁(昭49)

旭日双光章

栗原 伸夫(昭38)

瑞宝双光章

佐伯 陳哉(昭35)

で学生生活を過ごし、クラ
ブ活動や様々な活動を通じ
て知り合った同級生、多く
の先輩や後輩との交流は今
後の人生にとって何物にも
代えがたい貴重な宝物とな
ると思います。

さて、皆さんもすでに同
窓会の学生会員ですが、乃
はな同窓会の目的は、「会
員の親睦」と「医道の昂揚」
であります。医学部、病
院の発展に寄与し、学生の
皆さんに対しては、これま
で「白衣式」、「ちばBCR
C」、「クラブ活動、東日本
医科学生総合体育大会、亥
鼻祭、同窓会館の利用」な
どの様々な助成を行って参
りました。また全国に広が
る同窓会各支部、そして全
会員相互の情報共有や支援
を続けております。

現在行っております事業
の一端を紹介させていただきます。野球場跡地への医
学部・医学系総合研究棟開
設に合わせ、昨年末に閉鎖
された旧旧医学部本館
(旧病院)の歴史の編纂・
記録を動画に残す事業で
す。昭和11年に開院した旧
病院は当時「東洋一」と称
され、第一次世界大戦後の
世界的軍縮会議に従い日本
でも軍艦などの予算を削減
し、その一部があつた旧病院
の建築や豪華なステンドグ
ラスや壁のタイル張りなど
に充てられたようです。学
生時代には気づかなかつた
繊細な装飾も施されていま
す。また、開院当時の新聞
見出しには「千葉市の悪疫
地獄」とあり、腸チフス、
ジフテリア、赤痢などが流
行し、あの旧病院が感染症
との闘いの中心となつたこ
とが想像されます。昨年か
ら今年にかけて旧医学部本
館閉館と、新しい医学部・
医学系総合研究棟と「OC
などの中央診療棟の開院と
なりましたが、悪疫地獄と
言われないまでも新型コロナ
感染症に見舞われているこ
と、まさに歴史が繰り返さ
れています。皆さんは千葉
大学医学部の丁度転換期に
卒業の節目を迎えたことに
なります。

今日に至るまで皆さんも
学んだあの建物には多くの
歴史が刻まれ、戦後「OC」
の医師、世界中、日本中の
外科医師が旧病院へ手術見
学を訪れた記録も多数あり
ます。最近ではTVドラマ
にも建物の雄姿が映像化さ
れたのはご存じのことと思
います。

旧病院の歴史の記録は1
年以上前から行われており、
ZEMのドキュメンタリー
制作ディレクター、カメラ
マンに依頼し、旧病院の内
外の撮影、ドローンによる
撮影を行い、多くの資料の
発掘、先生方のインタビュー
を加え、この4月以降に50
分程度のDVDが完成予定
です。また5分のダイジェ
スト版は同窓会ホームページ
上に載せる予定ですが、
皆さん、ご家族の方々、教
職員の方々もどうぞ楽しみ
にしてください。

また、皆さんが初期研修
修了の2024年には千葉
大学医学部は創立150周年
を迎えます。150周年
の各教室とその発展につ
いての流れ、年表も作成中
ですのでいずれ皆さんの目に
ふれることと思います。

臨床研修の後に、皆さん
は臨床、研究、行政と様々
な領域に進まれ、活躍の地
域も千葉大学病院、千葉

県内の施設、東京をはじめ
とする他府県へと多岐に渡
ると思いますが、千葉大学
医学部卒業生として周囲は
必ず見ていることを自覚し
てください。私自身も千葉
大学医学部の臨床教室に入
局、院生で基礎教室に、そ
して県内関連病院研修の後
に、東京のある大学医学部
で25年以上教職におりまし
た。30代後半で赴任した際
、新天地には、千葉大学医学
部OBの教授、准教授、講
師が多数おられ、初対面と
思えないほどのサポートを
していただきました。直近では
同窓の複数の先生が全国の
大学への教授就任とのニュ
ースを受けました。同窓には
これまで臨床と研究の場で
輝かしい実績をあげられた
先生方、行政とくに厚労省
医系技官および局長として
活躍された先生方、日本医
師会長として敏腕を振るわ
れた先生に加え、本年は同
窓の一人が史上最年少で長崎
県知事に就任されました。

皆さんの将来も前途洋々
です。どうぞ自分自身で将
来の進む道を選択し、努力
を惜しまず邁進してください
。同窓会としてできる限
り支援したいと思えます。
ご卒業本当におめでとうご
さいました。頑張ってください。



令和3年度 卒業証書・学位記伝達式

の は な 同 窓 会

特別顧問就任挨拶

千葉大学 大学院医学研究院長・医学部長
松原久裕 (昭59)



会員の皆様には平素よりたいへんお世話になっております。千葉大学大学院医学研究院長・医学部長を拝命しております松原久裕で

す。この度、のとはな同窓会役員の皆様による御推挙にて特別顧問を拝命致しました。これまでより一層、医学部と同窓会の連携を深め、更なる充実を図りたいと今回の特別顧問の目的を伺っております。もちろん私自身、本学の卒業であり皆様と同じように愛着を持っておりますので、喜ん

でお引き受け致しました。どれだけ力になれるのか、いささか不安ではありますが、これまで私が歩んできた道と同じく、全力で役を全うしたいと考えております。ご指導、ご鞭撻のほど、よろしく御願ひ申し上げます。私自身のことに関して

が終了し、お陰様で非常に素晴らしい環境の中、教育研究が行われるようになっております。一方で皆様が本学に愛着を持ち、その一部を旧医学部棟が担っていることは間違いのないと思います。たいへん重厚で立派な味わいのある建物であり、建築としても重要な価値を有すると聞いております。しかしながら、この建物を残して活用するためには巨額な費用が必要な事も紛れもない事実であります。そのような中で一つの案として浮上したのが記念のビデオを残すという企画だと聞いております。旧本館メモリ

DVDはたいへん記念になります。現在旧医学部

棟は中に入ることもできない廃墟となっております。亥鼻キャンパスの中心にあり、今後の再開発はたいへん重要な課題となっております。個人的には旧医学部棟を一部分残し、新たな施設とともに現在、老朽化している施設を再構築したいと考えております。完全に処分するにしても、一部残すにしても多額の費用が必要であり、本学の重要な案件だと考えております。現在、キャンパスマスタープランの改訂が進んでおります。ぜひとも次世代に繋がる素晴らしい亥鼻キャンパスに発展させたいと考えて

おります。新医学部棟が完成し、連絡道路のあのすばらしい桜が破壊されてしまふのではと心配もありました。しかしながら、今年も一部景色は変わりましたが見事に桜が咲き誇りました。古き良き伝統と新たなイノベーションが融合した新たなキャンパスへの展開を期待しております。大学院医学研究院・医学部と同窓会会員の皆様の一層の発展を祈念して特別顧問就任の挨拶とさせていただきます。今後ともよろしく御願ひ申し上げます。

の は な 同 窓 会 特 別 顧 問 へ の 就 任 に あ た っ て

千葉大学医学部附属病院長
横手 幸太郎 (昭63)



この度、特別顧問を拝命しました横手と申します。「同窓会と医学部や附属病院との距離感を縮め、協力

連携を進めて全国へ発信したい」という理事会のご意向を受けての指名とお伺いしています。大変光栄に存じ、同窓会と病院のコミュニケーションを円滑にして、目的が達せられるよう微力を尽くしたく思います。私は、新型コロナウイルス感染症の第1波真っ只中

の2020年4月に病院長に就任しました。振り返れば、コロナ禍から病院と職員を守りつつ、重症・中等症のコロナの診療と千葉大学に求められるコロナ以外の高度急性期医療をいかに両立するかに専心する2年間でした。その中で、コロナに対して防戦一方の消耗戦だけでは空しく感じ、何とかこの危機を強みに転じることができないか？と考える日々でもありました。

大学病院が一般の医療機関とは異なる機能を発揮し、国民から評価されうるとしたら、それは研究と社会貢

献を通じて以外にありません。中山俊憲学長のご指導のもと関連病院のご協力を得てコロナ重症化予測マーカーの研究を実施したり、古関明彦教授から情報を頂いたドイツの研究施設のコンセプトを日本流・千葉大流にアレンジして「コロナワクチンセンター」を開設し、新たな研究を推進する

とともに千葉県におけるワクチン接種促進の一翼を担ってきました。そして、それらの活動を、これまで培ってきたマスメディアとの信頼関係を活かして分かりやすく社会へ発信できる

よう努めました。私は感染症に関する素人であり、ワクチンの知識もありませんでしたが、各分野の専門家との連携や工夫次第で千葉大学病院に新たな価値を付与しうることを学べたのは得難い経験であったと感じます。千葉大学医学部の卒業生は、一部の私立大学医学部などと比較して同窓会への愛着が少なくとも言われます。また、東京都内に比べれば、亥鼻キャンパスが立地条件で劣ることは否定のしようがありません。しかし、千葉大学医学部および



医学部歴史年表

医学部歴史年表を作成して

田邊 政裕 (昭49)



経緯

10年以上前に医学教育関係の学会で米国テキサス州のサン・アントニオ市を訪問しました。現在、世界遺産にもなっているアラモ砦の歴史的建造物が町の中心にあります。この建物は、18世紀初頭に先住民をキリスト教に改宗させる目的でスペイン王国が建てた伝道所です。内部は博物館として一般公開されています。

この建物を見学した際、感心したのが、長い壁一面に描かれた1718年の伝道所建設からアラモの戦いの舞台となったアラモ砦を経て現在に至る300年に及ぶ歴史でした。

るのほな同窓会は千葉大学医学部(本学)創立135周年の記念事業として新るのほな同窓会館を建築しました。当初、会館から周

歴史 1987年(昭和62年)

辺道路に直接つながる回廊を設置する計画がありました。アラモ砦の経験から、その回廊の壁面に医学部135年の歴史が一覧できるように年表を描くことを提案しました。この企画は記念事業の一環として認められ、歴史年表を千葉大学医学部八十五年史、千葉大学医学部百周年記念誌、千葉大学医学部135周年記念誌等を参考にして編纂しました。しかし、回廊を建設する同窓会館二期工事のめどは立たず、最終的に壁面年表は実現しませんでした。本学の歴史を可視化して、誰もがそれを見て、理解していただけることには意義があります。編纂した歴史年表は、デジタル化して同窓会のホームページにアップロードされ、現在、何時でも、誰でもアクセスできる形式で公開されています。(https://inohana.jp/hq/?p=4995)



小児外科学教室開設10周年記念会の挨拶で教授の高橋英世は、中山恒明の遺した言葉として、「まず始めること、始めたなら止めないこと」を紹介し、小児外科10年の歩みを振り返りました。その時、「いい言葉だなあ」と感銘を受けたことを記憶していますが、後にそれは1927年(昭和2年)に旧第二外科を創始した瀬尾貞信が遺した言葉に由来することを知りました。瀬尾は当時手術をすれば死ぬとされていた食道癌の外科治療を教室のテーマとして掲げ、それを達成するために外科医としての心構えを柱とする厳格な人材育成を実践しました。その伝統は中山に受け継がれ、食道癌の治療成績の飛躍的な向上に繋がりました。旧第二外科の教員は、当外科のみならず整形外科、脳神経外科、小児外科へと伝承され、60年の時を経て前述の挨拶として再現されたのです。本学、外科学の祖とされる三輪徳寛の遺した「獅胆鷹目行以女手」のロゴマークと共に、

「まず始めること、始めたなら止めないこと」は本学の言語的アイデンティティーとしてbegin.continueとなり、今に継承されています(図)。

瀬尾と同じ1927年(昭和2年)に馬杉復三が病理学第二講座の教授に就任しました。馬杉は東京帝国大学の長与又郎、緒方知三郎のもとで病理学を専攻し、千葉医科大学の助教としてドイツに留学し、Feiburg大学のレスレ教授のもとでアレギー学を学びました。帰国後、免疫機序による実験的腎炎の作製に取組み、独自の腎炎モデル(馬杉腎炎)を完成させました。この業績は遷延感作、自己免疫疾患など免疫病理の先駆けとなった研究であり、石橋豊彦、岡林篤の病理学第二講座各教授によって研究は継続、発展しました。免疫学は岡林に大学院生として師事した多田富雄によりさらに進展、深化して免疫応答の細胞制御機構の解明に繋がります。後に「ZPS」細胞を発見した谷口克ら多くの教室員によって世界的な研究業績が達成されました。

これから 本学の歴史を彩る代表

人事異動

教授

的な事例を紹介しましたが、これらに共通するのはbegin.continueです。瀬尾は手術をすれば死ぬとされていた食道癌の外科治療を、馬杉は生体は自己の体成分に対する抗体を産生しないことが定説とされていた時代に、異種抗腎血清を用いて糸球体腎炎を発生させる実験を、始めました。不可能、非常識とされていることに、敢えて挑み、それぞれの時間軸で様々な障壁を乗り越えて治療、研究を継続し、目標を達成しました。本学の歴史的業績として私たちはその伝統を今、年表によって確認することができます。破壊的イノベーションともいえるbegin.continueの歴史が、本学のアイデンティティーとなっていることを自覚すると共に、その伝統を継承し、新たなイノベーションを如何に創造していくか、現代を生きる我々に課せられた課題です。(敬称略)



呼吸器外科 坂入 祐一 (浜松医大・平16)	泌尿器科 佐塚 智和 (宮崎大・平17) (泌尿器科学助教より)	輸血・細胞療法部 三村 尚也 (平11)	子防医学センター 江口 哲史 (愛媛大・平20) (同助教より)	他大学教授 愛知医科大学病院 救命救急科 渡邊 栄三 (平9)	大分大学医学部 救急医学講座 安部 隆三 (平11)	大阪公立大学大学院 医学研究科肝胆臓外科学 石沢 武彰 (平12)	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医歯学教育開発センター、社会・行動医学医歯学教育学講座 横尾 英孝 (平17)	国際医療福祉大学医学部 救急医学 志賀 隆 (平13)	病院長 千葉医療センター 森嶋 友一 (昭60)	その他 地域医療機能推進機構 理事長 山本 修一 (昭58)	長崎県知事 大石 賢吾 (平24)
眼科 馬場 隆之 (東医大・平9) (同准教授より)	免疫発生学 平原 潔 (新潟大・平13) (同准教授より)	感染制御部・感染症内科 猪狩 英俊 (昭63) (同准教授より)	真菌医学研究センター 石和田稔彦 (平2)	総合安全衛生管理機構 潤間 励子 (平4)	循環器内科学 近藤 祐介 (北医大・平18) (同講師より)	人工知能(AI)医学 吉原 正仁 (天医大・平22)	呼吸器外科 鈴木 秀海 (平13) (同講師より)	泌尿器科 坂本 信一 (平11) (同講師より)	感染制御部 谷口 俊文 (平13) (同講師より)	講師 医学教育学 笠井 大 (平18) (病院特任助教より)	心臓血管外科 黄野 皓木 (平7) (同助教より)

就任挨拶

千葉大学大学院医学研究院

眼科学 教授

馬場 隆之 (東医歯大・平9)



令和4年(2022年)

1月1日付で千葉大学大学院医学研究院眼科学の教授を拝命いたしました。これまで同門、おのほな同窓会ならびに千葉大学の多くの先生方には格別のご指導、ご支援を賜って参りました。この紙面をお借りして、心より御礼申し上げます。

私は平成9年(1997年)に東京医科歯科大学を卒業し、眼科学教室へ入局いたしました。2年間の研修、都立広尾病院への出向のち医科歯科大学へ戻り4年間、網膜疾患の診療に携わりました。医科歯科大学眼科は日本で唯一強度近視外来を開設しており、所敬、望月學名誉教授、大野京子教授の指導のもと、近視性網脈絡膜病変の三次元

形態解析を研究テーマに学位を取得いたしました。その後、網膜硝子体手術の研鑽を積むべく、帝京大学市原病院(当時)から本院の教授となられた田中住美先生のもとで修業を始めました。週末以外は病院に寝泊まりして、網膜剥離の術前検査や手術手技、術後管理などを学びました。網膜硝子体疾患診療の考え方を身に付けることが出来たと思っております。

2006年に山本修一教授のご厚意により、千葉大学眼科に入局させていただきました。千葉大学眼科は網膜硝子体手術のメッカであり、黄斑疾患の構造と視機能に関する研究を行いつつ、硝子体手術の経験を多く積ませていただきました。2007年から2年半、米国Johns Hopkins大学、Wilmer眼研究所に留学し、Gerard Luty教授の指導の下、加齢黄斑変性と脈絡膜新生血管の基礎研究に従事しました。酸化脂質が網膜色素上皮、そしてブルッフ膜を傷害し、脈絡膜新生血管を誘導することを明らかにしました。ヒト脈絡膜新生血管に非常に近い有用なモデルと考えられています。

帰国後は、難治性の網膜硝子体疾患の手術を多数行う一方で、光干渉断層血管撮影の技術を用いた黄斑血管形態の変化や、手術アシユバンドによる黄斑回復の相違、眼底視野計を用いた網膜機能の評価などの研究を行ってきました。また本邦に多い強度近視に合併した黄斑分離症に対して耳側強膜短縮術が有効である事を報告しました。本研究では2021年度の千葉医学会賞を受賞させていただきました。深く感謝申し上げます。

大学は私にとって母校も同然であります。今後は千葉大学眼科を更に発展するべく、臨床および基礎研究、また診療にかかわる人材を

千葉大学大学院医学研究院

免疫発生学 教授

平 原

潔 (新潟大医・平13)



令和4年(2022年)

4月1日付で、中山俊憲前教授(現千葉大学長)の後任として千葉大学大学院医学研究院免疫発生学教授を拝命いたしました。おのほな同窓会員の皆さまをはじめ多くの方々にご支援を賜り、心より感謝申し上げます。「免疫発生学」は、昭和47年に初代多田富雄教授が環境疫学研究施設免疫研究部として開設されて以後、第二代谷口克教授、第三代中山俊憲教授が主宰されてこられました。このよ

育成し教室を盛り上げて参りたいと思っております。今後も末永くご指導・鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

叩き、基礎医学研究の道に足を踏み入れました。免疫発生学教室では、中山先生、本橋新一郎先生(現免疫細胞医学教授)、木村元子先生(現実験免疫学教授)からご指導を受け、「全力で研究を行うこと」で初めて、生命現象の一端を理解することが出来る」という基礎研究の基本姿勢を叩き込まれました。平成21年には、米国立衛生研究所NIHのJohn O'Shea先生のもとへ留学し、「獲得免疫系による慢性炎症疾患の病態制御機構に関する研究」に携わりました。次世代シーケンサーを用いた網羅的な遺伝子発現解析や各種イメージング技術など様々な先端手法を用いた多面的アプローチで疾患の病態形成機構の解明に取り組んだ経験は、自身の治療学への理解を大きく深め、現在、治療学研究を展開するうえで私の土台となっております。また、私と同じ時期にO'Sheaラボで共に学んだ世界各国の「同窓生」とは、国際共同研究という形で現在も密な交流が続いております。

新潟大学大学院へ入学後は、呼吸器の難治性疾患の病態について理解を深めたという思いから、中山先生が指導される教室の門を

今後は、世界と伍するトップレベルの研究を目指すことを第一義として、私を育ててくださった多くの先輩の先生方のご恩に少しでも報いるべく今まで以上に研究に邁進する所存です。また、若い研究者が自らの手による新たな発見で心の奥底から湧き出る「高揚感」を感じられるよう、千葉大学医学部の学術研究活動に微力ながら精一杯尽力する所存です。

平成25年に帰国する際には、今後の人生を基礎医学研究に捧げるといふ決意のもと、中山先生の研究室で、「免疫系による難治性炎症

疾患の病態制御機構解明および新規治療法開発のための基盤構築」について研究を開始しました。特に、「免疫系と他の生体システムとの連関をはじめとする免疫システムの多層性・複雑性を理解することで、組織の線維化など現在も根治的な治療法がない様々な病態を制御すること」を目標として日々研究に勤しんでおります。

いくつかの偶然が重なり、千葉大学との深い縁が私をここまで導いてくれたと感謝しております。千葉大学医学部おのほな同窓会の皆様方には、今後尚一層のご指導・鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

千葉大学医学部附属病院

感染症制御部・感染症内科の

教授就任にあたって

（新型コロナウイルス感染症の流行から）

感染症制御部・感染症内科 教授

猪狩 英 俊（昭63）



このたび、令和4年（2022年）4月1日、千葉

大学医学部附属病院感染制御部・感染症内科教授を拝命いたしました。これもひとえに千葉大学なのはな同窓会の皆様方のご指導とご厚情の賜物と心より御礼申し上げます。

2020年の新年は、中国武漢での新型コロナウイルス感染症に始まりパンデミックに至りました。日本国内でも今日までに6回の大きな流行を経験することになります。

千葉大学医学部附属病院では、早い時期から国内流行を想定した診療体制を整備してきました。その結果、2020年の1月29日、国内13例目の患者を診断する

ことになりました。このような感染症は、新興再興感染症とよばれています。今回の教授就任も、感染症診療と感染症対策の重要性が理解されたものと思っております。私は1988年に千葉大学医学部を卒業し、栗山喬之教授の呼吸器内科に入局しました。そこから10年間を振り返ると感染症領域へ繋がるたいせつな先輩方との出会いがありました。小野崎郁史先生は、最初の指導医で、後にWHOのP5のメディカルオフィサーとなり、カンボジア、ミャンマー等で活躍されています。千葉市立浜浜病院の菊池典雄先生には、感染症の臨床研究の面白さを教えていただきました。結核予防会千葉県支部の志村昭光先生からは、結核対策の重要性について教えていただきました。本格的に感染症に取り組

むのは、2003年に佐藤武幸先生が部長の感染症管理治療部に異動になってからです。早々にコロナウイルスによるSARS（重症急性呼吸器症候群）対応を迫られました。厚生労働省の事業で香港とハノイに行き実際にSARS診療施設を視察してきました。この経験は、今日の新型コロナウイルス感染症対応にも活かされています。2007年には新型インフルエンザのパンデミックを経験しました。2004年からは、国際協力機構の結核対策プロジェクトの短期専門家として、カンボジアとミャンマーで実施した結核ナショナルサーベイランスに参加しました。発展途上国、結核対策、国際協力について自分の医師人生にも大きく影響を及ぼす貴重な経験をしました。

2011年からの3年間の国立病院機構千葉東病院をへて、2014年4月より千葉大学医学部附属病院の感染症制御部に准教授として着任し現在にいたります。感染症対策は、医療安全の一翼を担うものであり、病院を支える基盤と考えています。これからは地域の医療機関との連携が求められます。新型コロナウイルス感染症を契機に、附属病院や医学研究センター、そして外部の研究者とのコラボレーションの機会が増えてきました。感染症領域を千葉大学の新たな強みに転じていくことが私に与えられた使命

千葉大学真菌医学研究センター

感染症制御分野 教授

石和田 稔 彦（平2）



令和3年（2021年）

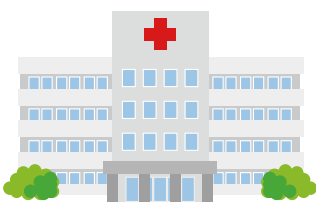
6月1日付で、千葉大学真菌医学研究センター感染症制御分野教授を拝命しました。私は1984年に千葉大学医学部に入學しました。祖父は、千葉大学出身の内科医でしたので、当時存命であった祖母が、入学を大変喜んでくれました。学生時代は、空手部、軽音楽部に所属し青春を謳歌しました。医学部2年生の時、バングラデシユの下痢

専門病院を訪問する機会を得たことをきっかけとして、国際保健と感染症の世界に興味を持ちました。友人と「世界の医療を考える会」を

命の一つと考えています。新型コロナウイルス感染症が終息しても、次の新興再興感染症にも対応できる感染症の診療、人材育成、研究の実現にむけて努力して参る所存です。

ご理解いただき、心よく送り出していただいたことに大変感謝いたしております。ガーナでの医療協力活動の中で、基礎医学研究と臨床現場をつなぐ仕事の重要性を痛感しました。帰国後は、千葉大学小児科に戻り、インフルエンザ菌、肺炎球菌感染症とその予防に関する研究に携わりました。2008年12月にインフルエンザ菌b型(H1N1)ワクチンが国内に導入され、定期接種化されたことにより、インフルエンザ菌による細菌性髄膜炎が千葉県内から排除されました。長年、この研究を主導されてこられた上原すゞ子先生にこのことをご報告した際に、大変喜ばれたことを良く覚えております。2011年からは、佐藤武幸先生が部長を務められていた附属病院感染症管理治療部に異動し、成人のHIV/AIDS診療、病院全体の感染管理に関する仕事をさせていただきました。その後、2014年からは、笹川千尋センター長、亀井克彦教授のご支援により、真菌医学研究センターにおいて、新しく臨床系の研究室を持たせていただき、現在に至っております。小児科の下条直樹教授、濱田洋

通現教授にもご理解いただき、小児科での感染症外来の診療も続けさせていただきます。最近では、予防接種のリスク教育に関して、千葉大学教育学部の杉田克生教授と共同研究をさせていただきました。現在、新型コロナウイルス感染症が猛威を奮っており、感染症対策の重要性が社会の中で強く認識されるようになってきています。今後感染症に関する研究・臨床・教育に積極的に取り組み、社会に役立つ仕事をしたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



千葉大学

予防医学センター 教授

櫻井 健一 (平4)



この度、令和3年(2021年)11月1日付で、千葉大学予防医学センター教授を拝命いたしました。

私は、平成4年(1992年)に千葉大学医学部を卒業し、当時吉田尚教授が主宰されていた千葉大学第二内科(当時、現内分泌代謝・血液・老年内科学)に入局しました。以後、齋藤康教授、横手幸太郎教授にご指導いただきました。当時の第二内科は、免疫アレルギーグループ、内分泌代謝グループ、血液グループ、消化器グループと4つの診療分野を併せ持つ診療科で、内科学全般の研修をさせていただきますました。

初期研修中に糖尿病という疾患に興味を持ち、大学院時代には牧野英一先生(前愛媛大学教授)と金塚東先生(昭48)の指導のもと、インスリンシグナル伝達や

糖尿病の遺伝要因に関する研究を行いました。大学院終了後、横浜労災病院への出張を経て、平成12年(2000年)に齋藤康先生の命により、森千里教授の着任と同時に解剖学第一(環境生命医学)に異動し研究室立ち上げをお手伝いさせていただきました。当時森先生は環境ホルモンの研究をされており、旧医学部本館1階の研究室では研究室のメンバーが和気藹々と過ごしており、時折料理などをして、親睦を深めたことも懐かしい思い出です。その後、医局に戻り、糖尿病の診療と研究を続けた後、君津中央病院の内分泌代謝科部長として赴任しました。君津中央病院にて地域医療に勤しんでいたところ、森教授よりご連絡をいただき、2015年より千葉大学予防医学センターの准教授として千葉大学に戻って参りました。予防医学センターでは、Developmental Origins of Health and Disease (DOHAD) 説に基づく研究として出生コ

ホート調査を行っております。DOHAD説は、胎児期から生後早期の環境因子が成長後のさまざまな疾患に影響を与えるという概念になります。私の研究テーマである糖尿病も胎児期環境の影響を強く受けることがわかっており、出生コホート研究はとても魅力的なものです。現在も、環境省が行なっているエコチル調査では千葉県内で約6000組の母子をフォローしています。また、予防医学センター独自のコホート調査として、ことも調査(C-MACH)を行なっており、第1期は400組をフォロー中であり、現在第2期のリクルートを行なっています。全体で約1000組の登録を目標としています。成人を対象とする内科医がなぜ出生コホート研究を行なっているのか、不思議に思われるかもしれません。糖尿病などの疾患を理解し、予防し、治療するためにはライフコース全体を見ていく必要があると考えています。糖尿病などの疾患を考える時、胎児期から老年期までのライフコース全体を俯瞰した研究が、これらの疾患を理解し予防法や治療法の確立に重要となります。

予防医学センターでの研究や社会活動を通じて、さまざまな疾患の理解や予防法の確立に貢献できるよう努力

千葉大学

総合安全衛生管理機構 教授

潤間 励子 (平4)



この度、令和4年(2022年)4月1日付にて、千葉大学総合安全衛生管理機構教授・機構長を拝命いたしました。これまで、

のはな同窓会の先生皆様には、格別のご指導を賜ってまいりました。この紙面をお借りして、心より御礼申し上げます。

私は、平成4年に千葉大学医学部を卒業し、呼吸器内科(当時の肺病研究施設第二)へ入局、栗山喬之名誉教授、巽浩一郎名誉教授のご指導を受け、千葉県内の病院で呼吸器内科医として勤めてまいりました。平成21年(2009年)3月に、ご縁があり、総合安全衛生管理機構へ入職する

力して行きたいと思えます。同窓会の先生方には今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

こととなりました。当時、同じ呼吸器内科ご出身の長尾啓一名誉教授が、機構長でいらつしやう、大学保健管理についての全てをご指導いただきました。長尾機構長が退任後は、消化器内科(旧第一内科)ご出身の今関文夫機構長のもと、千葉大学学生・教職員の健康管理・安全管理に従事してまいりました。

さて、私の入職後だけを顧みましても、2009年新型インフルエンザパンデミック、2011年東日本大震災、2020年以降の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミック、と大学に大きな影響を与える出来事が続げざるに起こっております。そのただ中でも、歴代の齋藤康学長、徳久剛史学長、中山俊憲学長先生方にご指導賜り、また歴代機構長の下、総合安全衛生管理機構一

究教育活動を滞りなく進めるという目標に向かって邁進してまいりました。特に、最近2年のCOVID-19パンデミックにおいては、従来から行っている業務に加え、学生・教職員の感染症対策と罹患した学生の健康観察、昨年からワクチン接種(職域接種・大学拠点接種)などの業務が増加いたしました。学内外に知られるのはな同窓会の先生方の強力なお力添えにより、これらパンデミック対策がスムーズに行えておりますことに、心より感謝申し上げます。

医師の働き方改革、教員の長時間労働、学生のメンタルヘルス不調など、大学を取り巻く健康管理・安全管理上の問題は絶えない昨今ですが、亥鼻キャンパスだけではなく、西千葉、松戸、柏の葉、墨田すべてのキャンパスで教育研究活動に携わる人々が、安全で健康なキャンパスライフを送ることができるよう、これからも全力を尽くしてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願申し上げます。

令和4年度 東京のはな会総会開催のお知らせ

日時：7月9日(土) 16:00~
場所：銀座アスターお茶の水水質館
(新お茶の水ビル21階)
JR御茶ノ水駅聖橋口

会費：10,000円

* 卒後10年未満の平成24年以降卒業者は無料ですので、受付で申し出てください。

* 詳細については下記にお問い合わせください。

東京のはな同窓会事務局
(医療法人社団 桐和会 内)
TEL: 03-5666-1334
e-mail: gfunayama@towakai.com

山梨大学医学部

救急集中治療医学講座 教授

森 口 武 史 (平9)



この度、令和2年(2020年)11月1日付で山梨大学医学部救急集中治療医学講座の教授に就任いたしました。

私は平成9年(1997年)に千葉大学を卒業し、千葉大学医学部救急集中治療医学講座に入局しました。愛知医科大学の教授に就任された渡邊榮三先生と同期入局です。以来平澤博之教授にご指導いただきながら、君津中央病院救急科、川崎製鉄健康保険組合千葉病院外科、千葉県済生会習志野病院救急科などを経て、平成17年(2005年)に山梨大学に赴任いたしました。山梨大学への転勤は、医局の先輩である松田兼一先生が山梨大学医学部の救急部初代教授として招聘されたことに伴うもので、私に打診があったのは着任予定日のわずか2週間前という慌

ただしいものでした。私はその時医師9年目、夢中になって臨床に明け暮れていた時でしたので、大学への赴任、しかもいわゆる落下傘で千葉を離れるのにはとても抵抗がありました。当初は松田兼一教授とともに、現千葉大学教授の中田孝明先生と、この春に大分大学の教授に就任された安部隆三先生と4人で乗り込みましたが、今考えるとエース級を送っていただいたのだと思います。私も2名と同じく半年の予定でしたが山梨県全体で救急専門医は一人桁人数、集中治療専門医は松田教授と私のみという状況で、千葉大学で叩き込まれた全身管理の知識と技能が求められているのを実感し、早々に考えを変え山梨大学で腰を落ち着けることに決めました。

などのネットワークのどこかに繋がりがありません。しかし山梨では千葉で感じた医師同士の「阿吽の呼吸」は望むべくもなく、院内外での信頼を得るため、紹介を受けた重症患者を積極的に引き受け改善させることを心がけてまいりました。平澤博之先生、菅井桂雄先生、織田成人先生、志賀英敏先生をはじめとする医局の諸先生方には、一般的な診療方法だけでなく、学術的に臨床を捉える姿勢を御指導頂き、私の医師としての基本はそこで叩き込まれたものだと思っております。中西加寿也先生、貞広智仁先生にもよく指導を頂きました。私は当初「臨床医としてやっていきたい」と大分学病院勤務へのお誘いを固辞しましたが、「研究も教育も、臨床医として成長する糧になるんだよ」という松田兼一教授の言葉も、やりたくない仕事をさせるための方便だと考えていました。しかし研究も教育も、実は臨床医としての私に不可分に繋がっていることを実感する今となっては、それは私のことを思っただけの間違いもない指導だったのだと思います。以前の自分を思い出すと汗顔のいたりと

しか言いようがありません。あまり興味のなかった海外留学も、今もチャンスがあったらもう一度行きたいと思うほど人生において重要な経験となりました。現在私は救急科長として、また病院の救急部および集中治療部の部長として、重症患者の診療から救急患者の初期診療、そして一種の災害医療というべきコロナ禍対策を担当しています。また、前任の松田兼一教授の立ち上げた重症患者に対する新規デバイスの研究を続けております。また、基礎医学系、工学系の研究室と融合研究を開始し、代謝解析により救急患者の重症度を超早期に診断するため、血清バンク構築を進めております。

現在山梨大学の救急集中治療医学講座の医局は、私が入局する前の千葉大学の人数にくらべて少し少ないぐらいの規模です。私はここからこの医局を、多くの教授を輩出し最終的には救命センターにまで活動の幅を広げた千葉大学の医局のように発展させることができればいいか、かつて私を指導いただいた諸先生方を思い出しながら努力を続けたいと思います。

大分大学医学部

救急医学講座 教授

安 部 隆 三 (平11)



この度、令和4年(2022年)4月1日付けで、大分大学医学部救急医学講座 教授、同附属病院高度救命救急センター長を拜命致しました。これまでご指導、ご支援下さった皆様に感謝申し上げます。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

私は福岡市出身で、千葉大学に入学するまで九州の地で育ってきました。千葉大学在学中は水泳部に所属して降り注ぐ太陽を存分に浴び、また、なのはな手話の会で聴覚障害の方々とは交流してきました。1999年卒業後は、千葉大学救急集中治療医学教室に入局し、平澤博之教授のご指導の下、救急医学、集中治療医学の臨床と研究に取り組んで参りました。

する救急医療と、主に病院内で発生した重症患者に対する集中治療を、両輪として行って来ました。千葉大学医学部附属病院だけでなく、公立長生病院外科、成田赤十字病院救急・集中治療科、山梨大学医学部附属病院救急部においても、診療科を超えて多くの先生方からご指導・ご支援を頂き、現在に至るまで非常に充実した臨床経験を積むことが出来ました。改めて御礼申し上げます。

研究に関しては、2002年に大学院に入学し、前学長の徳久剛史先生、現バイオメデイカル研究センター長の幡野雅彦先生のご指導の下、分化制御学教室にて、各種サイトカイン動態から見た敗血症の病態生理について研究を行いました。また2009年から2年間、米国コネチカット州のDr. Sumpioの研究室に留学し、重症病態における血管内皮障害に関する研究に従事しました。帰国後、織田成人教授のご指導の下、敗血症の病態と治療に関する研究、臓器不全に対する人工補助に関する研究を行って参りました。特に新型コロナウイルスパンデミックにより一躍注目されたECMOに関して、それ以前から基礎実験、臨床研究を行っており、パンデミックを機に設立された日本ECMOnetの立ち上げにも参加しました。



大阪公立大学大学院医学研究科

肝胆膵外科学 教授



石 沢 武 彰 (平12)

この度、縁あって大阪公立大学肝胆膵外科学教授を拝命しました。本学は、それぞれ長い歴史を背負う大阪市立大学と大阪府立大学が、統合の高いハードルを飛び越えて誕生した教育研究機関です。12学部・学域で構成される多彩な研究領域に、国公立大学として全国最大数となる学生が集い、「総合知」が醸成されることが期待されています。肝胆膵外科学講座としては、大阪市立大学第一外科、第二外科の伝統を継承させて頂くこととなります。4月1日に着任して以降、久保正二前教授のリーダーシップで達成された肝臓診療の実績、中でも職業性胆管癌に関する重要な知見を引継ぎ、発展させる重責をひしひしと感じる毎日です。

京大の門を叩きました。それは、大学の講義中に上映された幕内雅敏大教授(当時)の肝切除があまりに印象的であり、何とか直接教えを乞いたいと決意したからです。入局直後から、長谷川潔先生(現東大教授)のチームに配属され、懇切丁寧な指導を受ける幸運にも恵まれ、周術期管理や論文作成の「ABC」を習得することができました。不器用な私に手術のノウハウを伝授して頂いたのは、Brice Granger教授(パリ)と、がん研有明病院の齋浦明夫先生(現順天堂大学教授)です。研究面では、國土典宏先生の全面的なご支援の下、ICGなどの蛍光プローブを用いて手術中に癌や生体構造を描出する技術の開発に取り組み、臨床応用を進めて参りました。その過程で、東大薬学部の浦野泰照教授と出会ったことは、ノイエスを発見し実用に導く喜びを知る端緒となりました。このように、千葉大学・東京大学の諸先輩をはじめ、多くの先生方に臨床と研究の

知識・技術・スピリッツをご教示頂き、感謝の気持ち一杯です。これらの財産を余すことなく後輩に伝えることが、今後の私に課せられた第一の使命です。

肝胆膵外科は特徴の異なる複数の臓器を扱い、アプローチもロボット支援技術を用いた低侵襲手術から開腹による拡大手術まで多岐に及びます。非手術的な治療手段も日進月歩であり、「蛍光イメージング」が術中診断だけでなく積極的な癌治療に活用できる日も近いかもしれません。新規技術を含めて幅広い治療選択肢を揃え、その中から「最善の一手」を患者さんに提供すること、これを大目標に掲げ、医局員とともに精励して参ります。また今回の機会を活かして、日本の東西、世界の東西を繋ぐ情報交換と人事交流を促進する所存ですので、引き続きご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学医学部

救急医学 主任教授



志 賀 隆 (平13)

平成13年(2001年)卒業の志賀隆と申します。令和3年(2021年)4月1日より国際医療福祉大学救急医学教室を主宰させて頂いておられますのでご報告申し上げます。私は、学生時代より救急医学教室の織田成人先生、医学教育研究室の田邊政裕先生にご指導をいただき、「ERで働く救急医」を目指しておりました。また、所属していた「世界の医療を考える会」で増山茂先生、植田育也先生など諸先輩方にご教示を賜り、「海外で医師として働きたい」という気持ちをもつておりました。卒業後、東京医療センターにて初期研修を行い、在沖米國海軍病院にてサッカ一部との同期である谷口俊文先生とインターン生活を過ごしました。その後、浦添総合病院にて救命救急センター

とドクターヘリシステムの立ち上げに従事させて頂いてきました。

2006年に一念発起し、専攻医として冬の気温はマイナス35℃になる(水が地面に落下する前に凍ります)米国ミネソタ州メイヨークリニックで初の日本人救急医として働きました。Sadosty教授を始めとする素晴らしいERの教育者に「Anyone, Anything, Anytime!」と「Emergency Medicineの本懐を教えていただきました。また、Active Learningの柱の1つであるSimulation based medical educationにつき、かけがえのない教えをいただきました。その後、Simulation based medical education について教育・研究を積むべくハーバード大学医学部・マサチューセッツ総合病院でGordon教授、Brown教授の下で教鞭をとりつつ働きました。また、並行してハーバード公衆衛生大学院にてMaster of Public Healthを取得しました。

2011年の帰国後は、地域医療振興協会のお誘いで東京ベイ・浦安市川医療センターの救急部門の開設に従事しました。サッカー部で一緒した船越拓先生と救急搬送受け入れ年間1万件の病院・救急科研修プログラムを作り上げることができました。

2017年からは宮崎勝病院長のもと国際医療福祉大学三田病院そして国際医療福祉大学成田病院で救急部門を運営しております。歴史ある千葉県の中で「Anyone, Anything, Anytime!」と「Emergency Medicineの本懐を広げていければ」と、日々教室員と奮闘しております。

医学教育においては、渡米のきっかけとなった赤津晴子先生を始めとする素晴らしいリーダーの先生方とともに、多くの国内ならびにアジア各国の医学生のみならずと接する機会をいただいております。アメリカでの卒前・卒後教育のようにより「実践的で、学習者中心の医学教育」の実践と研究を今後も進めて参りたいと考えております。

COVID-19の流行の中、千葉県でも「公衆衛生と病院のコラボレーション」組織の醸成「病院の垣根を超えた連携」が求められております。私もDMATの活動を通じて、県救急医療センターの嶋村文彦先生、松村洋輔先生、千葉大学の谷口先生、吉村健佑先生を始めとする諸先生方に日々多くのことを学ばせていただいております。パンデミックの対応は私が学びを続けている救急医療システムの構築、多様な人材育成、公衆衛生のアプローチの本懐だと考えております。今回のパンデミック対応が次のパンデミックのための組織知の財産となるようにと思い、記録をつけ、臨床研究をしております。先生方のご指導に厚くお礼申し上げます。国際医療福祉大学成田病院は立ち上がったばかりの新病院です。引き続き、おのほな同窓会諸先生方のご指導ご支援をいただければ幸いです。何卒よろしくお願いたします。



鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

医歯学教育開発センター、
社会・行動医学医歯学教育学講座 教授

横尾 英孝 (平17)



このたび、令和4年(2022年)4月1日付で鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医歯学教育開発センター、社会・行動医学医歯学教育学講座の第二代教授を拝命いたしました。

私は、2005年に千葉大学医学部を卒業し初期臨床研修の後、千葉大学糖尿病・代謝・内分泌内科(旧第二内科)に入局いたしました。学生時代より生体のホルモンや代謝の恒常性維持機構、予防医学に関心があり、尊敬する横手幸太郎先生の熱いお誘いもあってこの領域を選びました。教室のモットーである「specialistである前にgeneralist」である前に横濱労災病院では西川哲男先生ら同門の先生方より多大なるご指導を賜り、大学院時代は櫻井健一先生が率いる糖尿病研究

室と同門の花岡英紀先生が率いる臨床試験部に所属し、学位論文では糖尿病の経口血糖降下薬併用療法に関する多施設共同の臨床研究をまとめ、成果を国内外に報告いたしました。

博士号取得後は2014年より教室同期の大西俊一郎先生と国保旭中央病院に赴任いたしました。診療圏人口100万人を支えるこの巨大な地域中核病院は、急性疾患の対応で糖尿病などの慢性疾患になかなか手が回らない状態でした。そこで私たちは地域全体を巻き込んだ糖尿病チーム医療の活性化を目指し、医療スタッフや患者の教育とチームビルディングに注力いたしました。コーチングという対人支援技術を体系的に学んで導入するとともに、組織マネジメントや地域医療連携の展開では同門である千葉県循環器病センターの平井愛山先生より貴重なご助言を賜りました。この頃より私は、医療従事者と患者のエンパワーメントや

先を見据えた大局的かつ多面的な視点を持つことがこれからの医療には不可欠と考えるようになりました。そして2016年からは千葉大病院の教育専任医師(アテンディング)として、

卒前教育にも本格的に携わるようになりました。医学教育については全くの素人でしたが、医学教育研究室の伊藤彰一先生、朝比奈真由美先生の教育愛に満ち溢れたご指導・ご支援により自診療科での教育活動を改善することができました。医学教育に大きなやりがいと自身の適性を認識した私は2020年より医学教育専任の教員となり、プロフェッションナリズム教育、OSCE、臨床研修医指導医養成講習会、看護師特定行為研修など診療科の枠を越えた教育活動も担当させて頂いていただきました。

引き続き伊藤先生・朝比奈先生の下で医学教育研究室の教員として研鑽を重ねる予定でしたが、急遽今回の異動となりました。冒頭で第二代教授と述べましたが、鹿児島大学の当センター・講座の初代教授は旧第一内科ご出身の田川まさみ先生です。学生時代に臨床入門や実習でご指導いただいた恩師の後任となれる

ことを大変光栄に存じます。今、医学教育は激動の真つただ中ですが、これまでの同窓の先生方のご指導と経験を活かし、今後は鹿児島

独立行政法人国立病院機構

千葉医療センター

病院長 森嶋 友一 (昭60)



令和4年(2022)4月1日付で千葉医療センター院長を拝命しました。

地から医療の発展と優れた医療人の輩出に貢献する所存です。引き続きご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は昭和60年に千葉大学を卒業後、奥井勝二教授の主宰されていた第一外科(現、臓器制御外科)に入局しました。奥井先生の人柄に惹かれての入局でした。その後、大宮赤十字病院、国立千葉病院、八日市場市立病院、千葉県立鶴舞病院等で研修しました。当時の第一外科は入局者も多く、関連病院も増えて、出張期間が年々延びていた時期でした。大宮日赤の諏訪敏一先生(昭43)には外科医の基本を徹底的に教えていただきました。また国立千葉の鈴木一郎先生(昭42)

には公私ともに大変お世話になりました。

大学では真島吉也先生(昭35)率いる代謝栄養グループに属し、田代重彦先生(昭43)、高木一也先生(昭58)のご指導のもと、「外科侵襲下におけるinsulin-like growth factor-1の効果」で学位を取得しました。当時の研究室は侵襲下でのエネルギー代謝や蛋白代謝などの解明および改善に重きを置き、多くの学位論文が生まれる活気に満ちた集団でした。平成7年からは助手として病棟主任も経験し、田代先生には食道癌手術を、山森秀夫先生(昭47)には腫瘍手術をご指導いただきました。この時期の大学の研究、臨床経験が私の大きな財産となっております。

平成9年に国立千葉病院に就職し、25年が経ちまし

た。外科医としては様々な腹腔鏡手術の導入、食道癌手術の定型化、栄養サポートチームの立ち上げなどに取り組みました。3年前からは副院長として医療安全、地域連携、救急医療などに取り組み、経営全般を学んでまいりました。

当院は14年前の千葉衛成病院まで遡ることができ、国立病院となつてからもすでに77年経ちました。この間、地域密着の急性期病院として発展してまいりました。現在ベッド数410床、診療科は30を数え、中規模ながら総合病院として、地域支援病院、がん拠点病院、災害拠点病院など多数の指定を受けております。臨床研修指定病院として毎年9名初期研修医を受け入れ、千葉大学からも1年生4名を纏掛けで受け入れています。また独自の専修医として内科・外科各一名が専門医を取得すべく研修中です。時に特徴がない病院と言われますが、

消化器および呼吸器の内科外科の医師数が多く、病院の中核を担っています。また脳外科は血管内治療において、学会でも先進的な施設と認定されています。がん拠点病院としては緩和ケア病棟を立ち上げ、他院か

らの患者さんも積極的に受け入れていきます。今後も急性期の総合病院として地域に信頼されるよう努力してまいります。ほとんどの診療科の医局は千葉大学でございます。引き続き同門の皆様のご指導ご協力をお願い申し上げます。

令和4年度総会において選出

名誉会員

- 千葉 次郎 氏 (昭48)
- 王 伯銘 氏 (昭50)
- 吉原 俊雄 氏 (昭53)
- 白澤 浩 氏 (昭57)

JCHO理事長に就任しました

山本修一（昭58）



2022年4月、尾身茂・前理事長の後任として、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）の理事長に指名され、厚生労働省において後藤茂之大臣から辞令を受けました。

JCHOは2014年に年金改革の一環として、社会保険病院、厚生年金病院、船員保険病院を統合する形でスタートしました。2000年代初頭、年金問題を発端として社会保険庁は解体され、保険料収入で全国に建てられた保養施設や病院は民間に売却されることになりました。しかし地域医療崩壊への懸念が強まり、総論賛成各論反対の嵐が吹き荒れて、病院は国が管轄する独立行政法人として運営されることになりました。このため、国立病院機構が国立から独法へ「天降り」したのに対し、JCHOは民間から「天上がり」した特

異な組織と言われています。現在、全国に57病院、15,000ベッド、27,000名の職員を擁し、総収入が4,000億円を超える巨大組織ですが、その特異な生い立ちのせいか組織としての一体感が欠け、JCHOの確立に苦しんできました。大半の病院が、統合までは潤沢な年金会計で「おらかな（放漫な）」独自経営を続けてきたため、発足にあたってはかなりの苦労があったと聞いています。尾身前理事長は、「壮大な社会実験だった」と当時を振り返っています。

JCHOはその設置法によって、国からは運営資金を一切出さないと決められているため、法人全体として赤字を出すことができません。このため各病院には収支均衡が至上命題として課され、結果として経費を削るばかりの縮小均衡策がとられ、多くの病院で投資が抑制されて活力が低下し、地域での地盤沈下に繋がっています。

千葉県内では、船橋中央病院と千葉病院がJCHO

にとつて要とも言える存在であり、特に、老朽化の著しい船橋中央病院の建替えは、理事長の初仕事として積極的に取り組んでいるところ。また東京都内では新宿メディカルセンター（旧・東京厚生年金病院）と城東病院において、千葉大の先生方が大活躍されており、とても頼もしくまた誇らしく感じています。

私は、2021年春に千葉大学を早期退職しこの1年間、病院支援担当理事として多くのJCHO病院を

長崎県知事



令和4年（2022年）3月2日に長崎県知事に就任いたしました大石賢吾です。

吉原会長はじめ、千葉大学なのはな同窓会の皆様には、日頃から格別のお力添えを賜り、厚くお礼を申し上げます。

私は長崎県の五島列島で生まれ、地元県立高校を卒

訪問して現場の愚痴を聞き、JCHOの奥底に広がる深い闇も覗いてきました。厳しい仕事を引き受けてしまった、というのが正直な気持ちですが、まずは基本に立ち帰って、「良質な医療の提供」と「健全な経営」のバランスをしっかりと、「地域で信頼され必要とされ続けるために」現場とともに汗をかいていきたいと考えています。

全国を飛び回る日々が続きそうです。

大石賢吾（平24）

業後、カリフォルニア大学への留学を経て、平成21年に千葉大学医学部へ学士編入学いたしました。在学中は、学部研究生として、代謝生理学（三木隆司教授）、循環器内科（小室一成現東京大学教授・南野徹現順天堂大学教授）で指導いただきました、その時の経験は今でも科学者としての礎になっております。卒業後は、千葉大学の研修プログラムとして、1年目は埼玉県厚生連久喜総合病院（現在は、新久喜総合病院）の救急科、内科、外科で、2年目

は千葉大学の精神神経科、整形外科、リハビリテーション科で学ばせていただきました。

初期臨床研修後、国保匝瑳市民病院での内科医としての勤務を経て、千葉大学精神神経科に入局し、伊豫雅臣教授のもとで精神医学の奥深さやサイエンスの可能性など、学ぶことの楽しさをご教授いただきました。

また、精神神経科では、臨床や博士課程での経験を通して、苦業を共有できる多くの仲間を得たところでございます。伊豫雅臣教授には、入局以前から今日現在に至るまで、公私共にご指導賜り感謝の念に堪えません。

ここで、私がなぜ政治を志したのかについても少しお話させていただきます。医師として従事していた訪問診療で、深刻な老老介護の現場を目の当たりにし、「医療だけでは地域の方々の生活を守れない、公助の在り方を変える必要がある」と思い政治を学び始めました。しかし、政治に対する確かな知識経験もないまま政治家になれる訳はございません。そこで、「今の自分には何ができるのか」と見つめ直した際、「あるいは医療・福祉

行政であれば何かの一助になれるかも」との思いに至り、臨床医としての職を辞し、厚生労働省に入省いたしました。

厚生労働省では、医政局地域医療計画課救急・周産期医療等対策室において、特に災害医療分野を担当し、医療提供体制の整備等をはじめとする幅広い医療政策の立案・施行に携わりました。また、新型コロナウイルス感染症についても、厚生労働省内に設置された新型コロナウイルス対策推進本部において、医療班で兼務し関係省庁と連携・協働しながら、国の最前線で戦う経験に恵まれました。大変忙しい日々ではありましたが、改めて振り返ってみると、常に国民のために力を尽くす多くの仲間に出会え、刺激を受けた、掛け替えのない経験を得ることができたと感じております。

入省2年目には、外郭団体である日本医療研究開発機構（通称AMED）革新基盤創成事業部に事業推進課長として赴任し、医療分野における研究開発支援に携わりました。所管事業であったAMEDは、産官学連携を基本として、創薬に加えて医療機器開発等の実用化を加速化する支援をし

ていたことから、全国の研究機関や民間企業と触れ合う機会も多く、大変やり甲斐のある仕事でございました。また、AMEDは厚生労働省のほか、経済産業省と文部科学省を母体としていることから、他省出身の職員も在籍しており、多様な意見や業務遂行の在り方に触れるなど、本省とは異なる大変興味深い経験を得ることができました。

さて、去る2月20日投票で執行された選挙では、長崎県全県内で23万9415票を得て、3月2日に第20代長崎県知事に就任いたしました。

長崎県は、国際色豊かな歴史に加えて、地域性に富む文化や食、美しい自然に恵まれ、魅力溢れるところがございます。医学の分野においても、長崎港を玄関口として古くから西洋医学がもたらされ、その歴史と変遷は皆様の興味も引くのではないのでしょうか。今日では、長崎大学にBSL4が設置され、今後、感染症領域を軸に国際学術都市としての発展も期待しているところ。です。

一方、新型コロナウイルス感染症対策をはじめ、人口減少・少子高齢化など、課題も山積しております。

長崎県は、全国の中で最も島嶼の数が多く、全国共有の課題であっても、地域特有の困難さを伴います。長崎県の未来づくりの舵取りを担う県知事として、県民の皆様により豊かで安心安全な暮らしを提供できるよう、これまで県政の発展に尽力してこられた中村前知事の取り組みをしっかりと活かし、必要に応じて新しい視点や発想も取り入れながら取り組んでまいります。私自身、歴史ある千葉大学の卒業生としての誇りを

受章の挨拶

瑞宝中綬章

瑞宝中綬章を受章して



加藤 誠 (昭47)

令和3年秋の叙勲にはかわらず瑞宝中綬章の栄に浴しました。これもひとえに横手幸太郎病院院長始め歴代の病院長並びに、関連各科の教授の皆様方の永年に渡るご指導、ご支援の賜と深く感謝申し上げます。コロ

持ち、皆様と共に学び培ったのはな魂で邁進する所存でございます。コロナの感染状況が収まったら、是非千葉大学のはな同窓会の皆様にも、長崎にお越しただけましたら幸いです。結びとなりますが、千葉大学のはな同窓会の皆様のご健勝と千葉大学の更なるご発展を祈念し、私のご挨拶とさせていただきます。今後とも、変わらぬご指導・鞭撻を宜しくお願いいたします。

ナ禍のため、日本赤十字社本社において、社長より勲章をいただきました。私は昭和47年千葉大学を卒業し、牧野博安教授の主催する脳神経外科学教室に入局し、翌48年の前半は成東病院（現山武医療センター）にて外科研修、後半は千葉大学にて麻酔科研修し、49〜50年は永野俊雄教授のもとで解剖学を勉強した後、51〜52年は成田赤十字病院にて研修、53年は

再び千葉大学に戻り助手として研修。54年より成田赤十字病院に常勤医として以後39年間勤務しました。当時376床（プラス印刷伝染病床46床）の病院は、昭和60年600床（プラス657床、精神科50床、感染症科7床）となっていました。私は59年脳外科部長になり、翌60年の日航機墜落事故の際は、赤十字救護班の一員として遺体検案に携わりました。そして平成7年副院長となり、平成11年8月前院長福本泰彦先生（昭31）の病氣退職により、院長となり、以来平成30年3月退職するまで18年8か月院長を務めました。この間平成15年地域がん拠点病院、16年特定感染症指定医療機関（未知の感染症の国内への流入を防ぐための病院。当時全国で3か所）、18年千葉県2番目の地域医療支援病院、23年地域周産期センターになりました。赤十字病院として国内、国外災害救護にも力を入れ、平成12年の有珠山噴火災害、三宅島噴火、県内、県外台風、集中豪雨災害のほか、新潟中越地震、中越沖地震、東日本大震災、熊本地震にも救護班を派遣し、国外ではハイチ、ウガンダ、イラク

に医師を、フィリピン、パキスタン、ハイチに看護師、スイス、フィリピン、ウガンダ、ネパール、バングラデッシュに薬剤師を派遣

旭日小綬章

令和3年度「旭日小綬章」を受章して

諸岡 信裕 (金沢大・昭48)



令和3年秋の叙勲で、「旭日小綬章」を受章致しました。これもひとえに、長年に於ける千葉大学医学部のはな同窓会の諸先輩方や同門の先生方のご支援助とご指導の賜物と、深く感謝しております。私は、昭和48年に金沢大学医学部を卒業後、千葉大学医学部第三内科に入局し、循環器内科学の研修と研究が始まりました。循環器疾患の画像診断が私の研究テーマとなり、故稲垣義明先生や増田善昭先生のご指導の下、「X線CT」による肺うっ血の診断」の研究により、学位を頂きました。そして、第三内科の助手・講師・医局長に就任した後、

しました。今後も精進してまいりますので、引き続きご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

平成5年に故郷の茨城に戻り、小川南病院院長として、地域医療や高齢者医療に携わる事となりました。先ず始めに、医療と介護の現場を直視するために、介護支援専門員の資格を取り、社会問題になりつつある認知症高齢者について、茨城県とも連携しながら、

また、茨城県病院協会会長として、台風被害や今般の新型コロナウイルス感染症に対しては、積極的な支

介護保険等の研修を行い、更に、茨城県医師会の役員に就任しました。平成12年から令和2年まで、約18年間、理事・常任理事・副会長・会長として医師会活動に奉職し、その間、団塊の世代が、すべて後期高齢者になる2025年問題に対して、「茨城型地域包括ケアシステム推進センター」を立ち上げ、医療・介護・福祉の分野における多職種連携の重要性を踏まえ、四師会（医師会・歯科医師会・薬剤師会・看護協会）の連携強化を進めました。

最後に、この様な栄えある受章は、今までの皆様方の多大なるご支援やご指導の賜物であり、心から御礼申し上げます。

JPW2022 / Japan Basic and Clinical Pharmacology Week 2022
 第96回日本薬理学会年会 / 第43回日本臨床薬理学会学術総会 同時開催
つなげよう、つながろう
 2022.11.30(※)~12.3(±)
 パシフィコ横浜

第96回 日本薬理学会年会
 The 96th Annual Meeting of the Japanese Pharmacological Society
 会長 安西尚彦 千葉大学大学院医学研究科薬理学 教授 獨協医科大学医学部 特任教授

【連絡先】〒541-0047 大阪市中央区東船場3-6-13 (株)コンフレム Tel: 06-6229-2555 Fax: 06-6229-2556 E-mail: jpw2022@congre.co.jp www.congre.co.jp/jpw2022/

東京るのはな会

2022年 25号

ISSN 1343-103X

Inohana Tokyo



Vol. 25

JANUARY.1. 2022

東京のはな会

千葉大学医学部のはな同窓会 東京支部

目次

Inohana Tokyo vol.25

Page

巻頭言	新会長の挨拶	岡本 和久	4
	副会長就任のご挨拶	赤倉功一郎	6
	東京いはな会副会長を拝命して	齊藤 光江	7
	東京みのはな会副会長3年目の挨拶	井上 賢治	8
	東京みのはな会新体制にエール	吉原 俊雄	9
	新理事就任の挨拶	小風 暁	10
	新理事よりご挨拶	沖水 聡子	11
	ご挨拶	甲賀かをり	12
	新理事よりご挨拶	柳沢 如樹	13
	新理事よりご挨拶	武藤 剛	14
	新理事就任の挨拶	田 啓樹	16
	人との出会いに繋がるプラットフォームを目指して	千先 園子	17
新たに教授等に就かれた先生方より			
	日本医療安全調査機構(医療事故調査・支援センター)の役割	矢島 鉄也	19
	JCHO 理事に就任しました	山本 修一	24
	帝京大学医学部附属蒲田病院教授就任のご挨拶	三浦 文彦	26
	産科麻酔の普及を目指して	加藤 星絵	29
卒業後、節目の年を迎えて			
	卒業60年を振り返って	岩倉 弘毅	32
	卒業50年を迎えて	菊池 友允	33
	卒業40年を迎えて	松島 常	34
	卒業30年目を迎えて	緒方 直史	35
	卒業30年のことば 今までも振り返って「あつて知っていますか?」	山本 正二	36
	卒業20年を振り返り	鎌谷洋一郎	38
	卒業20年を迎えて	坂田 阿希	39
	卒業20年のことば	椎名 由美	40
	卒業20年を迎えて	田中 純子	41
	卒業10年のことば	川合 祐美	42
	卒業10年目を迎えて	舟越葉那子	43
厚労省だより			
	医系技官として勤務を始めて	井上 雅寛	44
	厚生労働省における医系技官と人事交流	勝山 陽太	48
	昭和大学のコロナ対策とるのはな同窓生の動静	中村 清吾	51
	史実から読みとるパンデミック	横須賀 忠	53
	コロナについて 近況報告		55
編集後記			59
収支報告書			60
東京みのはな会会則			79

静岡のはな会

令和4年1月 第30号

第30号

るのはな静岡

コロナ禍が定着して久しいが、今年も冬は厳しい状況が続いている。皆様も体調を崩さないよう、くれぐれもご自愛ください。この会報が皆様へ届くまでには、多くの関係者のご協力が必要です。ご不明な点がございましたら、事務局までお問い合わせください。



宮本 恒彦(854)

これからの支部活動 支部会員とは何なのか

るのはな静岡

発行 令和4年1月吉日 第30号
発行所 静岡のはな会
編集 静岡のはな会編集委員会

このように状況で支え続ける必要がある。支部活動の重要性はますます高まっている。支部活動とは、支部員が互いに支え合い、共に成長していくことである。支部活動を通じて、お互いの悩みや悩みを共有し、支えあえる。また、支部活動を通じて、お互いの力を発揮し、共に成長していくことができる。支部活動は、支部員にとって大切な活動である。支部活動を通じて、お互いを支え合い、共に成長していくことができる。支部活動は、支部員にとって大切な活動である。

支部活動を通じて、お互いを支え合い、共に成長していくことができる。支部活動は、支部員にとって大切な活動である。支部活動を通じて、お互いを支え合い、共に成長していくことができる。支部活動は、支部員にとって大切な活動である。

るのはな静岡 第30号

目次

これからの支部活動	支部会員とは何なのか	静岡みのはな会会長 宮本 恒彦	1
総会報告			2
日食病		宮川 国久	3
雑感	かけい医院院長	山本 俊樹	8
静岡みのはな会と浜松医療センター			
浜松医療センター 呼吸器内科		笠松 紀雄	11
本部理事会での話題から		宮本 恒彦	13
みのはな会で出会ったユニークな方々		宮本 恒彦	13
平岡 眞先生 (昭和23年卒)			
望月 良夫先生 (昭和30年卒)			
中村 泰久先生 (昭和40年卒)			
理事会報告			
紙上理事会	(2021.2)		18
紙上総会の結果報告	(2021.6)		18
紙上理事会	(2021.7)		18
2022年総会に関する報告	(2021.8)		19
掲示板			
令和4年度総会のお知らせ			24
編集後記			24

最終講義

16年を振り返って



平成17年12月より16年余りを千葉大学で過ごさせていただきました。初めてキャンパスに足を踏み入れたとき、レンガ壁の重厚な建物と緑の多さと巨木に驚いたことを覚えています。春には杏、サクラとアーケードと続き、とても贅沢な気分になりました。雪国で長く暮らしてきた私にとっては冬のスカイブルーも魅力のひとつでした。

平成17年は、「産科医療崩壊の危機」という言葉が使われ始めた時期です。千葉大学でも産科医は少なく、なんとか産科医療を支えている状況でした。当然、私に課せられた仕事は「リクルート」でした。まず、学生教育に力を入れることにしました。まだ「教育を実践する」ことに対する評

生殖医学 生水 真紀夫 (金沢大・昭56)

価が高いとはいえない時代でした。シミュレーターを手作りしてハンズオンセミナーを実施、朝食つきで朝7時からモーニングセミナー(臨床編)、昼にはランチョンセミナー(研究編)を開催しました。毎年夏休みには、全国から学生を募り、バスで千葉県内の周産期施設を回り、夜は房総のペンションで産科医や新生児科医と熱く語りあうというサマーセミナーも企画しました。また、医学部学生を対象にNCDPR(新生児蘇生法)資格取得講習を全国に先駆けて開催し、底辺の拡大を図りました。さらに、新たに始まった周産期専門医制度では資格の取得が容易になるように体制を迅速に整えました。5年を過ぎるところから入局者数も増え安定するようになりました。今では多くの医師が周産期専門医を取得し、関連病院などに勤務しています。

赴任当時、周産期医療が抱えていた課題がもう一つありました。それが母体死亡です。子どもを産んだばかりのお母さんが亡くなることはとても悲しい出来事です。2006年には帝王切開中にお母さんが死亡した件で執刀した産婦人科医が逮捕されるというショッキングな報道がありました。さらに、救急搬送された妊婦さんの「たらい回し」が社会問題となりました。このような事態を防ぐには、(1)高水準の医療を着実に実施できる施設を地域に整備し、(2)地域の医療機関が高次施設へ搬送するハードルを低くすることが大切だと考えました。まず、麻酔科のご協力を得て、緊急帝王切開を速やかに実施するための手順を整備しました。帝王切開の決断から30分以内に胎児を娩出させるためことを目標にしました(グレートA帝切)。手術の緊急度をAからDに分類することで、産科医、麻酔科医、新生児科医、看護師が短時間で手術の緊急度を共有で

きるといのが要諦です。結果的に、手術の決断から20分程度で胎児を娩出させることができるようになり、臍帯血pHが改善しました。その後、この手術緊急度の分類システムは千葉大学附属病院全体で共有されるようになり、嬉しく思っています。次に、輸血部や検査部そして救急部のご協力を得て「コードむらさき」を作りました。「コードむらさき」は、宣言されると既定の手順で大量輸血を含む救急救命のチーム医療が一気に実施されるというものです。当時は、「貴重な血液」のために大量輸血が制限されており、また出血傾向の治療に有効な薬剤が保険診療の縛りなどで使えない状況にありましたが、「コードむらさき」が一つの突破口になりました。「コードむらさき」がうまく機能するようドリルを重ねた後に、満を持して地域の医療機関にこのシステムを解放しました(地域さんかプロジェクト)。これを単純に表現すると、一次・二次医療機関で救急救命治療が必要となった妊婦さんについては、常時受け入れるという宣言です。大病院は「コードむらさき」のアイドリング状態を維持するために多く

の医療資源を投資しています。これを地域に解放して役割分担による連携をすすめ、医療地域の支援と底上げをはかろうと考えた訳です。これにより妊婦さんだけ無く、一次や二次医療を担うスタッフにも安心感を与えることができました。いろいろなプロジェクトを立ち上げる度に、名前を付けて愉しみました。「コードむらさき」はコードブルーの向こうをはって、採血管の紫からとったものです。カタカナと平仮名を組み合わせて生じるちよつとした驚きを狙った命名です。千葉大学産婦人科は、長年にわたり子宮頸癌や絨毛性疾患の治療に実績を挙げてきた教室です。子宮頸癌は、放射線併用化学療法により治療成績が向上すること、HPVワクチンにより子宮頸癌そのものが減少すると考え、将来の増加が見込まれる子宮体がんや卵巣癌を新たなテーマに加えることにしました。子宮体がんでは、妊孕性温存療法を新たに開発し医師主導臨床試験を開始することができました。卵巣癌では、術者を固定して卵巣癌手術専門チーム(チームOvar)を立ち上げ拡大手術に取り組んだ結果、治療成績は向上し

手術数が増加しました。絨毛性疾患では、分子生物学手法を導入するとともにコホート研究の環境を整備することが出来ました。これらの臨床成績は多くの論文にまとめることができ、New Engl J Medにも2報を載せることができました。教室員が「症例を記録することは臨床医の義務」「観察結果から合理的に考えること」を実践してくれたことに感謝しています。教室からは、4名を他大学の教授に送り出すことができました。私自身は「考えることの愉しさ」を味わわせてもらいました。有り難うございました。

定年退職者の辞令交付を行いました

千葉大学大学院医学研究院では、令和4年3月31日に今年度末をもって定年退職される白澤浩教授、生水真紀夫教授、松江弘之教授の辞令交付が行われました。

辞令交付の後、松原久裕医学研究院長から、永年の教育研究へのご尽力に対し、感謝の意が述べられました。

(千葉大学大学院医学研究院・医学部ホームページより転載)



左から、松江教授、生水教授、松原研究院長、白澤教授

最終講義に寄せて

千葉大学真菌医学研究センター
臨床感染症分野 亀井 克彦 (昭56)



令和4年3月末日をもって定年により千葉大学を退職致しました。1981年(昭和56年)に千葉大学を卒業後、東京都立府中病院(現、東京都立多摩総合医療センター)の第1回目の研修医として医師生活をスタートさせました。その後、同呼吸器科、公立昭和病院呼吸器内科など様々な病院で主に呼吸器内科医として勤務し、純粋な臨床医としての道を歩んできました。しかし、世の中に論文が溢れるようになり、その中には一見立派に見えたり華々しい結果を提示していても信頼性に疑問を感じられるものも少なからず混じっていたことから、一度しっかりと論文を書くような研究を行なわなければ、他人の論文を読んでも表面的な理解に留まってしまう、と考えるようになり、最近

のEBMやガイドラインのブームは心配されるのですが、論文の作り手は当然のこととして、読者がどのように論文を読み解くかという要素もきわめて大切になりに思います。この点で、学位を取るような研究を行なう、というのは臨床医にとって大切なトレーニングだと考えており、昨今の「専門医がとれば学位はいらない」という風潮には強い危惧を感じております。ずっと臨床医一筋で続けて行きたいという思いもあったのですが、決心して1987年に母校の肺病研究施設内科(現 呼吸器内科)に戻ってきました。医員(助手)として勤務する傍ら、研究面では恩師である鈴木光先生(東京都立府中病院)の薫陶もあって呼吸器感染症研究を志したのですが、当時、千葉大学で唯一感染症の基礎研究を行っていたのは真核微生物研究センターであったことから、こちらで研究を始めました。結局、これが契機になり、真菌感染症を専門

とするようになったのですが、当時は内臓への真菌感染である深在性真菌症はあまり注目されておらず、専門家もほとんどいませんでした。研究を開始した時点では全く陽の当たらない領域だったので、その後、真菌感染症が注目され飛躍していった様子を見ると、隔世の感があります。その後、Stanford大学感染症内科への留学や東芝病院呼吸器内科の勤務などを経て、真菌症の専門家として1995年に真菌医学研究センターの助教に赴任しました。結局、呼吸器内科での勤務を含めると、千葉大学では30年以上にわたりお世話になったことになりました。

研究では附属病院の呼吸器内科で患者さんに遭遇したのを契機として、キノコ(スエヒロタケ)が人の肺に感染してアレルギー性気管支肺真菌症(ABPM)を起すことを発見し、世界で初めて報告しました。当時は真菌の遺伝子同定法など行われておらず、その診断はきわめて困難であったことから現実には多くの症例が看過されているのではないかと考え、その血清学的診断法を確立するとともに、当時大学院生で研究に

日本では初めての専門外来となりました。その後は千葉大学真菌医学研究センターの臨床感染症分野を研究の拠点とし、臨床と並行してアスペルギルスの病原性やbiofilm、それに耐性機構の解析などを中心とした研究を展開し、今日に至っています。現在は、大学は研究だけしていれば良い、とされた時代は去り、社会貢献も大学の大切な活動として認識されるようになりました。私は「千葉大真菌センターを日本の真菌診療の最後の砦にしよう」と考え、真菌センター内に「真菌症リファレンスセンター」を開設しました。文字通り日本中の病院から多くのコンサルテーションを受けつけて診断や治療法の相談に乗るとともに、「真菌症検査で出来ないものはない」を目標にして一般病院では行なえないような特殊な検査を年間数百件受け入れて、「真菌症なら千葉大に相談すれば何とかなる」という体制をつくるのが出来ました。いずれも先輩の先生方のスタッフが支えてくださったからこそと考えております。この間皆様から格別のご厚情を賜りましたこと

とを、ここに厚く御礼申し上げます。退職後は、幸い名誉教授という肩書きも頂きましたので、しばらくはゆつくりしたいという思いもありました。しかし、私の恩師の一人である鈴木俊光先生(公立昭和病院)が晩年をずっと東北地方の医療機関で地域医療に携わってこられたことや、東日本大震災の被災地復興への思いもあり、退職後しばらくはこの地域で地域医療に貢献したいとも考えておりました。そのような中、偶然にも声をかけてくださる知人がおり、退職後の4月から宮城県石巻市にある石巻赤十字病院で働かせていただいております。もともと東北地方には感染症の専門医が少ないことが学会でも大きな問題でした。同病院では感染症の専門医を育てる構想を進めており、私の赴任を機に同病院に感染症内科を設立して、研修指定病院として若い先生方に育っていただくことを目指しています。これにより、この地の医療の将来のために貢献できると考えております。またこれと並行して、千葉大では特任教授として附属病院での真菌症専門外来を、隔週で継続することとなりま

した。千葉と石巻を往復しながら、全く新しい東北という地で新たな領域の仕事を始めることになり知力、体力ともに厳しいのですが、これまでの経験を活かして、この地域の医療の将来のために道筋を作りたいと考えております。最終講義の準備は想像していたよりも遙かに苦悩に満ちたものになりました。私自身の歩んできた道を振り返ると、結局何事もなしえなかったのではないかと強く感じられたからです。いくつかの仕事をするには出来ましたが、それぞれが完成したかと問われれば、まだまだやるべきことを多く残してしまい、後世の先生方に託した形となりました。しかし考え直してみると、これから大きく花開く数多くの種を蒔き蓄を育てることが出来たとはいえ、多少はお役に立てたのではないかと思っております。私がお大きな影響を受けた先輩方と同じように、私自身がその背中で若い人を育てることが出来たかという点は心もとないのですが、多くの人材が育ってきているのは間違いない、今後を楽しみにしております。同窓会の先生方には大変お世話になりました。先輩

の先生方には、今後とも若い先生方に温かい手を差し伸べていただきますように、そして若手の先生方には、ともすれば画一的な医療に進みがちな世間の流行に流されずに、しっかりと自分の道を歩んでほしいと希望

最終講義に代えて

退任の挨拶

分子ウイルス学 白澤 浩 (昭57)



本会報に本学教授就任の挨拶文を寄せたのが、つい昨日のことのように思い出されますが、本年3月末日をもって、約四半世紀にわたる千葉大学教授（ウイルス学）としての責務を果たすことができました。省みますと、大学の教官となつてからは、ほぼ全力で走り抜けた感がありますが、自分を育ててくれた大学への恩返しであるのと思い、同級生をはじめ多くの同窓の方々のお力添えのお陰で完

しております。振り返ってみれば呼吸器内科医としてはいつのまにか大きく道をはずれてしまいました。そのような中、ずっと支えてくれた家族に改めて感謝したいと思っています。

走ることができました。改めて心より感謝申し上げます。

昨年、長年親しんだ旧病院（旧医学部本館）から新棟への移転という節目を経験することができ、多くの同窓の先生方の人生の一部を担った「旧病院の記憶」を残す同窓会事業に携わることとなりました。その際に、過去の記録を辿り節々の状況を伺い知ろうとしましたが、議事録等の単なる記録から当時の教授会の思念を知ることの難しさを感じました。そもそも、現在においても、大学の意思が教員一人一人の意思を反映しているとも限らないわけですから、当時の大学の意

思すらも測りかねるといのは当然のことかもしれせん。そのような理由から、私が過ごした千葉大学医学部の意思の一端を記録に残すことの意味もあろうかと思ひます。私の行ってきたウイルス学の教育・研究については稿を改めて報告させて頂くこととして、以下、大学の管理・運営に大学評議員・部局長として関わってきた者として、その変遷を御報告し、退任の挨拶に代えさせて頂ければと思ひます。

私は、1982年に千葉大学医学部医学科を卒業後、高見澤裕吉先生（産婦人科学名誉教授）の元で、産婦人科医として研修を積みました。卒業後は産婦人科の実家に戻り家を継ぐつもりでおりましたので、研究者になろうとは微塵も考えていませんでした。このような経緯から、基礎医学研究者にして教育者となった私が抱えた命題である「医学研究者育成」に対して私

むことではなく「涵養する」ことであるとの結論に至りました。それは、医学教育の前提だと、受け取られるかもしれないですが、その一点に留意して教育を行えば、そのような教育を受けた医学生は研究者となる種を抱えて医師となり、そこから芽が出るかどうかは、環境次第だと思ひます。もちろん、そのような人材であれば、研究者の芽が出て来なくても、一流の医療者となることは間違いありません。

私が助手時代に、研究室に出入りしていた学生がいまもいた。当時、その学生さんは研究者には向いていないかもしれないと私は判断していましたが、芽は予想を越えて大きくなり、若くして某大学医学部教授となつたことは、この考えを強く後押ししてくれました。

た当初は、研究に割く時間を確保すべく、最大の教育を最小のエネルギーで行うことを目指した結果、任期の大半を学部教育関連の委員会でも過ごすこととなり、入試委員長、学務委員長を拝命して、気がついた時には、田邊教授、田川まさみ先生（昭56）（後に熊本大学医学教育学教授）と共に医学教育の旗振り役となつていました。現在では、医学教育の原則として当たり

「教育」に対する教員の考え方をいかに変えるかということでした。伝授型の講義は最小限に留め、「自習」ではなく「自修」する教育を行い、アウトカムによる評価をすべきであるとする概念は、未だ全教員に浸透できていないのが現状です。元々、JACMEによる評

価は、2023年以降、国際的な医学教育評価基準を満たさない医学部出身者には、2023年より米国の医師ライセンスを与えないとする米国の事情に端を発するもので、孤高の医学教育を行ってきたと自負していた本邦の医学部は、戦々恐々となりました。流れを同じくして、2004年に国立大学は法人化し、「競争的環境の中で世界最高水準の大学を育成する」を掲げ

たものでしたが、法人評価認証評価が大学に導入される端緒となり、JACMEによる評価は分野別認証評価という位置付けに落ち着くに至りました。何を変えなければいけないのかを漸く大学自身が分かつてきたというのが現時点の状況であると感じています。自由な教育・研究を行えるのが大学の魅力であると考えて大学の教官となつた者には、半ば裏切られた状況に移行していったとも言えます。

ある国立大学の姿です。表向きの理由は尤もですが、裏を返せば、少子化が進む中で大学数（教員数）を減らざるを得ず（定員削減）、減らすための方便として競争的手段が合理的であるということとなります。小さくなる未来しかない国立大学に、大きくなる夢を持つ企業と同じ原理を持ち込むには少し無理があるように感じているのは私だけでしょうか。

国立大学法人の予算の大半は依然として運営費交付金であり、減らされた交付金の補填に当てる外部資金は予算全体から見れば微々たるものになります。法人化して自由になつたとはいえ、収入の大半を占める授業料を自由に設定することすら出来ないのが現状です。文部科学省は、「全員が生きていく必要はないが」この先を生き抜いていくには自活するしかないでしょうか？今のうちから計画的に小遣いを減らしてあげるから、努力して自活する方法を学びなさい。励みになるでしょう？」と子供に言い聞かせている親に似ています。評価（法人評価、認証評価）は法人化と表裏一体ですが、第三期中期計画が終

働基準は毎回厳しさを増してきています。いよいよ正念場というところで大学を去ることとなりますが、同窓の皆様と一緒に我が母校

退任のご挨拶

皮膚科学 松江弘之(昭62)



2022年(令和4年)

3月31日に、約15年間勤めました医学研究院皮膚科学教授を定年退職いたしました。その間、ものはな同窓会の皆様方にご支援、ご指導を賜りましたことを深く感謝いたします。この新型コロナウイルス感染症のパンデミックが収束し、以前のような日常をいつ取り戻せるかは予測できません。これからさらにウィズコロナの期間がしばらく続き、それがニューノーマルになるのでしょうか。コロナ禍、最終講義のリモート開催も考えましたが、活舌が悪く、言い直しも多い私の場合はそのような形式よりも、はじめから文章の方がよりメッセージをお伝えで

を見守って行きたいと思えます。今後とも、引き続き御指導・御鞭撻をお願い申し上げます。

きるのではないかと思います。『最終講義に代えて—多彩な皮膚科の未来に向かって—』の拙文を雑誌『千葉医学』に寄稿させていただきました。(千葉医学98:63-69, 2022 doi:10.20776/S03035476-98-3-P63) 私の人生を振り返ると、2つの大学(東京大学理学部、千葉大学医学部)で学生として学び、3つの大学(北海道大学、山梨大学、千葉大学)で医師として診療、教育、研究に従事し、その間、米国テキサス大学サウスウェスタン医学センター(ダラス)に2度留学(約9年間)する機会を与えていただいたことは、大変幸せなことでした。『千葉医学』には、学生の皆さんや大学院生などの若い先生方が将来を考える上で多少なりとも何かの参考になればと思います、大学生時代の思いのままに書いています。お時

間のある方は斜め読みでもしていただければと思います。

さて、皮膚科の特徴の一つは疾患数が多いことです。その多彩な疾患の病因解明、病態理解、治療法開発が、他科の疾患に遅れをとることなく近年著しく進んでいます。今後も未来に向かって発展し続けるでしょう。10年後、20年後の未来の皮膚科は、今は想像できないほど発展しているかも知れません。いや、是非そうあって欲しいと思います。その発展の核となるのは多様性の尊重ではないでしょうか。よく言われることですが多様性は科学の発展の根底にある発想力や想像力を育み、疾患の複雑な病態の本質を多角的に捉える視点を生み出します。特に次世代を担う若い医師の先生方にとって、自分が進みたい道を見つけて、トレンドに拘泥しないで、様々な発展をする方向へ飛び出して欲しいと思います。私が千葉大に赴任してからも、皮膚科の数多くの分野の中で、特定の分野に興味を抱き、その分野を極め始めた医師達が活躍しています。最近の例を挙げれば、皮膚病変をダーモスコープ、非侵襲

して、そのパターン分析による診断向上を目指し、企業と共同でそのデバイス

の開発にも関わっている医師、がんの個別化医療の実現を真剣に目指して、クロノタイプレベルで研究をしている医師、利用可能なビッグデータを駆使して、その科学的分析によってよりエビデンスの高い有益な診療情報の提供を目指している医師、病原体の環境適応と疾患の関係について追及している医師達などが今も頑張っています。さらに、海外で研究代表者として研究を継続している医師、また、国内の他施設でプロジェクトリーダーとして世界の最先端の研究を継続している医師もいます。彼らは、多彩な皮膚科の未来の発展に向かって、多様な方向に一步一步進んでいると思えます。皮膚科学教室は、私が赴任した時は10人に満たない人数でしたが、徐々に大きな教室になっています。一緒に働いた皆さんは、本当に一人ひとり個性的な素晴らしい医師たちです。臨床・教育・研究の場で、個性的に活躍していくと思います。その活躍できる基盤にあるものは何でしょうか。

の診療科には、日々、様々な社会的背景、合併症を持つ重症の患者さんが数多く紹介されてきます。当科・他科の医師のみならず、様々な職種のコメディカルの方々の連携なくしては、そのような患者さんの難しい医療ケアは成り立ちません。我が国の医療・介護制度、予算の制約のなかで、本当に当院のすべての職員が、患者さんのためにできる限りのことをしていると思えます。病院として、このような質の高い診療を提

供できる体制の基盤があつて初めて、質の高い医学教育、医学研究が実践できるのです。皮膚科診療に専念して取り組み、皮膚科

の診療の向上と教育の充実、研究の発展に当科の皮膚科医が日々取り組めるのは、そのような病院としての基盤のおかげだと思っております。

その基盤の根底にあるのは千葉大学に受け継がれている『千葉大話法』だと思います。私が2006年から千葉大学に来て、まず、教授会、病院運営会議などの様々な会議で多くの教職員の発言を聞いて「他人の意見を尊重し、他人を直接的に非難せず、しかも、自分の意見をしっかりと、礼節をもって述べる」話法に感心しました。さらに、この話法の重要なポイント

のようなニュアンスを含んでいないところです。医学部、病院でこの高いコミュニケーション能力は、『千葉大話法』と呼べるほど伝統として根付いており、医学部、病院

での質の高い研究・診療・教育を提供できる基盤の根底にあるものだと思います。これは、ものはな同窓会の諸先輩方が大切に引き継いできたものだと思います。無責任な言い方ですが、「種を蒔く人」がどうであれ種は自ら成長できる土地を求められるでしょうか。一老兵が去っても、この千葉大医学部、その附属病院は、彼らを温かく包摂してくれる肥沃な土地であり続けるでしょう。

2022年 第47回
ものはな美術展
 —千葉大学医学部OBによる美術展—
 9月12日(月)~9月18日(日)
 AM11:00~PM6:00 最終日4時

初秋の候、益々御清栄のこととお慶び申し上げます。例年通り下記の会場で、第47回展を開催いたします。ご多用中恐縮ながら何卒ご高覧賜りたくご案内申し上げます。

銀座 千代田区銀座5-9-13 銀座菊正ビル2F
 TEL:03-3573-1680

研修プログラム

千葉大学医学部附属病院 脳神経内科の 研修プログラム・臨床・研究

千葉大学大学院医学研究院 脳神経内科学
教授 桑原 聡 (昭59)

脳神経内科の扱う診療領域は common diseaseとしてアルツハイマー病・認知症性疾患(全国患者数600万人)、脳血管障害(300万人)、パーキンソン病(30万人)、神経障害性慢性疼痛(100万人)、てんかん(100万人)が頻度の高い5大神経疾患(約1200万人)と、希少疾患(多発性硬化症、重症筋無力症などの神経免疫疾患・脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、筋ジストロフィーなどの神経難病)に大別されます。非常に広範かつ多数の疾患領域をカバーする診療科ですので、神経疾患診療の社会的需要はますます増大してきています。

[1] 研修プログラム
卒後3〜5年目が専門医研修として位置づけられ、日本神経学会専門医の資格を得るのが卒後6〜7年目になります。この時点までに指導医のもとで上記の広範な領域の疾患を経験することになります。臨床研修の柱は(1)診断学・部位診断、臨床診断に至る科学的思考を身につけること、(2)特に進歩の著しい神経画像・分子生物学・電気生理学の技術と解釈に精通すること、(3)神経治療学・分子標的を含めた最先端の治療を実践できることの3点を重視しています。

[2] 臨床・研究
千葉大学脳神経内科には左記の主な臨床・研究グループがあります。
(1)アルツハイマー病
(2)パーキンソン病
(3)神経免疫疾患
(4)神経変性疾患
(5)神経画像
(6)神経生理学・末梢神経疾患
(7)分子遺伝学
(8)自律神経
大学院入学時にそれぞれの研究グループに配属になります。ここでは臨床と研究が一体化した総合的研究を行います。すなわち分子生物学、免疫学、神経画像、生理学などの技術を用いて患者検体(血清、髄液、遺伝子)を用いたバイオマーカー、病態研究を行います。ひいては新規治療のシーズを開発し臨床試験で有効性を検証して薬事法承認を得て全国・全世界で実

際に患者さんを治療できる薬剤を開発しています。当教室では実際に2021年にPOEMS症候群に対するサリドマイド療法の承認を得ました。ギラン・バレー症候群に対する抗補体C5モノクローナル抗体療法も治療が終了し2023年には承認を得る予定です。これらの治療により疾患の予後は飛躍的に改善し、疾患を克服することを目指しています。脳神経内科領域においても分子標的治療、遺伝子・核酸医薬などの画期的新規治療の開発が行われており、ようやく神経疾患を克服できる時代が来しました。当教室においても世界に先駆けて多くの病態に即した新規治療の開発を強く意識した臨床・研修体制をさらに発展させたいと考えています。



第97回千葉医学会 学術大会

日時：2022年10月28日(金曜日) 15:00～17:15
会場：千葉大学ゐのほな記念講堂

特別講演

「研究が創る世界」

演者：齋藤 康 先生 (千葉大学 名誉教授/未来医療教育研究機構 特別顧問)
座長：横手 幸太郎 先生

招待講演

「From bench to bedside and hospital management」

演者：横手 幸太郎 先生 (千葉大学大学院医学研究院 内分泌代謝・血液・老年内科学 教授/
千葉大学医学部附属病院 病院長)

座長：齋藤 康 先生

※本講演会の座長は演者の先生に相互でご担当頂きます。

※本講演会は日本医師会生涯教育講座(1単位 CC:0.その他)として承認されています。

◆参加費：無料

◆事前申込：【10/28 学術大会参加希望】と明記の上、「お名前、ご所属、連絡先(e-mail, tel, fax)」をご記入頂き、下記事務局までe-mail又はfaxでお申込みください。
※当日受付も可

問合せ：千葉医学会
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1 千葉大学医学部・ゐのほな同窓会館内
TEL: 043-202-3755 FAX: 043-202-3757
e-mail: info@c-med.org URL: https://www.c-med.org/



齋藤 康 先生



横手幸太郎 先生

小田原市立病院

外科系診療部長
千葉大学医学部臨床教授

清 家 和 裕 (平3)

小田原市立病院は神奈川県小田原市にあり、最寄り駅のJR小田原駅からはバスで5分ほど、小田急線足柄駅、大雄山線井細田駅からは徒歩圏内です。小田原駅は新幹線の停車駅でもあり、東京駅から30分ほどで着くことができます。また、小田原厚木道路や西湘バイパスなどのインターチェンジがすぐそばにあり、車でもアクセス良好な場所にあります。昭和33年に開院した神奈川県西湘地区の中核病院であり、血液内科、歯科、口腔外科を除く24の診療科と19名の初期研修医を含め122名医師が在籍しております。病床数は全417床で、地域がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、救命救急センター、災害拠点病院などに認定されています。

現在では外科と消化器科に千葉大学からの医師が勤務しています。病院全体では横浜市立大学を始め北里大学、昭和大学、東海大学などの神奈川県からの大学からの医師が集まっています。現在1学年9〜10名在籍しております。土地柄横浜市大が多いですが、昭和大学など私立大学出身者にも人気があるようです。研修医の学術的教育は病院として重要課題として取り組んでおり、カリキュラムやマニュアルの整備などを現在行っています。神奈川県の中では給料が良い(トップクラスと聞いています)というのも人気の理由のようです。コロナ禍では、第1波で院内クラスターを発生し、ご記憶の方もいらっしゃるかと存じますが、その際は、



小田原城の桜

外科病棟とICU病棟が閉鎖され、多大な影響を受けました。また、内科病棟もクラスターが発生してしまいました。その反省もあり、2022年2月1日より全職員が1週間に1枚配布されるZOOMを勤務時間は常時着用し、第6波では絶対に院内クラスターを発生させまいと一丸となっておりま。現在4週目になります。院内ICUの指示に従順な土地柄、人柄が窺えるかと思えます。

小田原市は神奈川県西部に位置し、海と山に面している、風光明媚な土地柄です。小田原城だけではなく、すぐ西には箱根や真鶴半島さらには伊豆半島があり、北には丹沢連峰にも囲まれ、居住環境は特筆すべきものがあると考えています。写真は小田原城の桜ですが、多くの見物客がいらして、神奈川県でも桜の名所と言われており、私も毎年楽しみにしています(本来は病院の写真を掲載したいところですが、老朽化もあり、遠慮させていただきます)。

現病院は昭和60年に改築され、病院の老朽化により新病院建築準備が始まっており、2026年開院予定です。現地での新築となっており、今まで同様交通の便が良く、規模としては大きな変化はありませんが、現病院と比べ、さまざまな改良が期待されております。また、ロボット手術も導入予定であり、将来の神奈川県西部の拠点病院としての機能を維持していけるように体制を整えています。

最後になりますが、小田原厚木道路の車窓から新病院が皆様のお目にかかれるのも間近だと思えます。研修希望の方、就職希望の方、当院にご興味があれば是非見学にいらして下さい。

研修医だより

いい泌尿器科医を目指して

千葉大学医学部附属病院 泌尿器科

木 下 涼 (平29)



本年度より千葉大学医学部附属病院に泌尿器科専攻医として勤務しております。このような伝統ある同窓会報の記事を執筆させて頂くことに、恐れ多くも光栄に感じております。

私は卒後の初期研修を船橋市立医療センターで行い、平成31年度に千葉大学の泌尿器科後期研修プログラムに登録し泌尿器科医としての後期研修が始まりました。私が医師を目指したのは高校生の時、大学進学が視野に入る頃でした。自分の将来のビジョンを想像したとき、幼いころから医師として働く父親の姿を身近で見えて育ったこともあり医学部受験を決定しました。学生時代、初期研修医時代までは専攻科は決めていません

でしたが、治療や手技の多様性、研修病院である船橋市立医療センターをはじめとした泌尿器科全体の雰囲気、専攻医時代から数多くの症例を執刀医としても経験できるなどといった、ここでは挙げきれない程の多くの魅力がある泌尿器科を専攻することを決意しました。父が耳鼻科医であり耳鼻科専攻も考えていましたが、直接父に相談した際、「自分が決めた信じた道を選ぶべき間違いない。」と快く背中を押してくれたこともあり迷わずに決断することができました。

泌尿器科で診る疾患は尿路結石や前立腺肥大症、排尿障害等の良性疾患から前立腺癌、腎癌、尿路上皮癌、精巣癌等の悪性疾患まで多岐に渡っており、臨床はもうろん研究をするにあたってでもテーマが溢れています。臨床においては外科的治療のほか、前立腺癌に対する内分泌治療、排尿障害に対

する薬物治療等、内科的治療も診療において不可欠な存在であることに加え、各種悪性疾患に対する化学療法や放射線療法など様々な治療を経験することができま

す。前述したように、泌尿器科の大きな魅力として、そのような多岐に渡る治療を専攻医時代に責任ある立場で経験できることがあります。私も専攻医1-2年

目の間に、多数の内視鏡手術に加え、腎癌や膀胱癌に対する開腹手術や腹腔鏡手術を経験させて頂きました。

泌尿器科医になって3年が過ぎましたが、その3年の間にも新しい治療法や手術方法が次々と生み出されており、まだ経験したことのない手術、治療を今後自分が実践できると思うと楽しみでなりません。

これから専攻科を決める医学生や初期研修医の皆様は、様々な科をローテートする中で、自分が一生医師としての生活をなさげられる科かどうかという視点をもつて廻ってみて下さい。担当患者さんの病気や治療について勉強することにプラスαで、その診療科の医師の仕事、自分が数年後にすることをリアルに想像しながら実習あるいは研修を行ってみることが、今後

数十年携わる診療科を決めるヒントになるはずですが、自分自身も同門の素晴らしい先輩方を身近で見ながら、数年後の自分の姿を想像し、

追 悼

奥井勝二先生を偲んで

千葉大学大学院医学研究院
臓器制御外科学 教授

大塚 将之 (昭63)



少しでも先輩方に近づけていよう、また少しでもいい泌尿器科医に近づけるよう日々邁進して参ります。

千葉大学医学部第一外科学教室(現大学院医学研究院臓器制御外科学教室)元教授である奥井勝二先生が令和3年12月5日にご逝去されたとの報を受け、私を含め教室員ならびに同門会員は大きな喪失感にまつまれています。先生は平成30年7月末に西千葉駅前

で転倒されて以来、療養生活に入られ、この2年間はCOVID-19感染の蔓延もあり、お目にかかることもなかなかかなわないうちでお知らせに、ご冥福をお祈りするばかりでありました。

奥井勝二先生は、大正14年9月24日、茨城県土浦市にてお生まれになり、土浦中学校、弘前高等学校理科二類を経て千葉医科大学に進学されました。昭和28年に御卒業後は千葉大学医学部附属病院にて1年間のインターンの後、河合直次教授が主宰されていた千葉大学医学部第一外科に入局されています。その後、綿貫重雄教授のもとで助手、講師を勤められ、医局長としても活躍されました。伊藤健次郎教授時代にはスウェーデンのルンド大学外科にご留学され、胃の病理細胞診に関する研究を展覧させ、臨床に応用されています。そして、昭和55年8月に、三輪徳寛教授から数えて6代目にあたる千葉

大学医学部第一外科学教室教授に就任されました。教授時代は、私も含め、毎年14-15名の新人医局員を迎え、研究、診療活動が活発化するにも関連病院を育てることも努力され、教室と関連病院の連携を保つ重要な会議としての洽仁会を再開されました。また、第42回日本大腸肛門病学会、第29回日本臨床細胞学会、第26回日本外科代謝栄養学会を主宰されています。私は千葉大学卒業ですの

で、学生のころ臨床講義やベッドサイドなどで、奥井先生の講義を受けました。初めてお会いしたのはその頃ですが、当時は教授と学生でしたので、個人的に話をするとということはありませんでした。また、昭和63年に入局後も1年間教室に在籍した後、関連病院に研修にでましたので、奥井先生が在任中は大学病院では1年間研修をさせていただいたのみになりません。しかしながら、その1年間の間にも、先輩の先生方が比較的自由に研究や診療を行っていたことが思い出されます。当時は消化管を含む消化器外科、乳腺甲状腺外科、心臓血管外科の診療を行うとともに、腹腔内温熱・化学療法や代謝・栄養

などの研究も活発に行われていたと記憶しています。私自身は、教授と新入教室員という関係ですので、それほど多くお話しをしたわけではありませんが、私の父と奥井先生は古くからお付き合いがあったようで、そのことに関してよく声をかけていただけていました。私が大学へ帰局したときは、先生はすでに退官されていましたが、教室同門会はもろろんのこと、歓迎会や忘年会、送別会など教室行事には欠かさずご出席くださり、ご挨拶をいただきました。先生は人一倍、教室に愛着をもち、教室の歴史を大変よく勉強されておりましたので、そのようなお話を聞けることは大変興味深く、楽しいひとときでありました。私が縁あって臓器制御外科学教室の教授を拝命したときには、大変喜んでくださり、歴代の教授の先生がたへのご報告とご挨拶方々、千葉に眠る先生がたの墓前に自ら案内して連れて行ってくださいました。先日のお別れの会でも述べましたが、教室の歴史・伝統を思い直して教室を運営していつてほしい、という意図があったのではないかと解釈しています。温故知新！先生がよく口にしていた言葉かどうかは分かりませんが、まさにそれを望まれていたのだろうと今さらながら思い起こしております。

その一方で、奥井先生は、後輩たちの成長を願うとともに、それを大変楽しみにされておりました。奥井教授時代は、そのお人柄もあり、大変雰囲気の良い教室、という評判でしたので、今では考えられないほど多くの入局者を迎えていました。そのような後輩たちに、学会や退官記念のときといった寄付を奥井奨学金として残していただきました。奥井奨学金は若手医師が海外の学会で発表するときの援助として毎年数名に授与され、教室例会(同門会)のとき表彰されることになっていきます。思えば先生が療養生活に入られて、いつとき千葉大学医学部附属病院にも入院されていました、そのときに無理を承知でその表彰に出席いただけないか、とお話して出席いただいたのが教室行事への最後の参加となつてしまいました。そのときは、同門一同、心配をしていたなかでのご出席でしたので、奥井先生のお姿を拝見できたことは、授賞者はもちろん同門一同、大変うれしく感じ

たことをよく覚えております。また、千葉県外科医会においても長年要職を勤められ、千葉大学の旧第一外科、第二外科のみならず、千葉県内すべての地域で活躍される施設の外科医の育成、教育に尽力されるときにも、外科医同士がしがらみなく友好を温め合うことに大きく貢献されました。これも毎回必ずご出席いただいた奥井先生の後輩を思う心、お人柄によるところが大きかったのではないかと考えています。

け、それを大切に思っている先生がたはたくさんいます。私もその一人であり、先生のご指導とともに暖かい励ましのお言葉を頂けたことは、本当にかけがえないことと感じています。大好きなお酒を飲みながら

坂田早苗先生を偲ぶ

十川 康 弘 (昭55)



もつといろいろなお話をお聞かせいただき良かったという思いは強く残ります。先生の遺志をついでこれからも精進していきたいと思えます。改めてご冥福をお祈りいたします。

先生は昭和9年4月21日、埼玉県北葛飾郡北川辺村の出身です。28年に東京都立両国高等学校を卒業され、34年に千葉大学医学部を卒業、インターン修了後、35年に中山恒明先生が主催されていた千葉大学第2外科に入局されました。中山外科で消化器外科を専攻され、在局中、栃木県の上都賀総合病院外科に出向されました。37年に上野賀総合病院からの千葉大学第2外科の総引き揚げがあり、先生はその際、残務のため数カ月間居残りをして苦勞されたことなど直接伺ったことがあります。栃木県には

公的病院として厚生連病院日赤病院、済生会病院があります。その内、厚生連の上野賀総合病院、下都賀総合病院(現TMC)もつが、塩谷病院(現国際医療福祉大学付属塩谷病院)などの外科に当時千葉大学第2外科から医師が派遣されておりました。その後先生は医局に戻られ医学博士を取得されました。41年に宇都宮駅からほど近い、宇都宮外科病院(現宇都宮記念病院)の副院長として病院立ち上げに貢献されました。61年に大和田操先生(2外OB)の死去により理事長・院長に就任され、平成元年9月の退職まで務められました。東京で成人病健診を専門に行っている中山教授のクリニックである中山メディカルでの研鑽や、宇都宮記念病院での成人病健診の経

験を生かされ、平成3年に予防医学を主眼としたミヤ健康クリニックを宇都宮市内に開院し、今日まで地域に貢献されてこられました。学生時代は柔道部に所属され、講道館柔道六段、囲碁初段、その他にスキー、テニス、卓球等を愛好されました。栃木県では多くの2外OBが活躍されており、なかでも水沼三郎先生が中心となられた栃木外科医学会で坂田先生も活躍され、日本外科医学会の理事長を務めてこられました。日本外科医学会をNPO法人化するにあたり、認定医制度などの関係で日本外科学会などと軋轢があり大変ご苦勞されたこと伺っております。

先生は昭和9年4月21日、埼玉県北葛飾郡北川辺村の出身です。28年に東京都立両国高等学校を卒業され、34年に千葉大学医学部を卒業、インターン修了後、35年に中山恒明先生が主催されていた千葉大学第2外科に入局されました。中山外科で消化器外科を専攻され、在局中、栃木県の上都賀総合病院外科に出向されました。37年に上野賀総合病院からの千葉大学第2外科の総引き揚げがあり、先生はその際、残務のため数カ月間居残りをして苦勞されたことなど直接伺ったことなどがあります。栃木県には

先生が大変お酒が大好きで、お飲みになると大いに楽しくお話になられるというところでした。時には少々お過ごしになり奥様にお迎えをお願いすることもあったそうです。私が上野賀総合病院に赴任した折にも温かく会に迎えていただき何かにつけてお心を配っていただきました。先生のご冥福をお祈りいたします。合掌

故 青木 謹先生を偲んで

白 澤 浩 (昭57)



青木謹元先生は同窓会理事(昭和36)が、令和4年(2022年)1月29日に御逝去されました。青木先生、永い間、どうもありがとうございました。私が水泳部に入部した時からの縁で、青木先生には40年以上にわたり公私共々お世話になりました。私にとつての青木先生は、水泳部OBの一人であり、産婦人科の先輩でもあり、あのはな同窓会理事会、同窓会編集委員会の同僚でもありました。「〇〇の青木です!」という、良く通るお元気な声を聞けなくなってしまうと残念でなりません。おそらく、〇〇の部分でこれほど多い先生もいらつしやらないです。私が上野賀総合病院に赴任した折にも温かく会に迎えていただき何かにつけてお心を配っていただきました。先生のご冥福をお祈りいたします。合掌

下さいました。想像に難くないのですが、他にも大量の記録を残されたことと思えます。編集委員会では、「写真を大きく一人ひとりに分かるように」載せるように必ず指示された姿が懐かしく思い起こされます。同窓会報を紐解けば、青木先生が書かれた記事も多く、青木先生ご自身のお元氣な御姿を数多く見ることができ、突然の御逝去の知らせに驚くばかりです。

安房医師会より 青木 謹先生を弔う

原 久 彌 (昭34)

青木先生は、安房医師会病院院長、安房医師会会長等を歴任するなど、ここに記すには紙面が足りないほどではありますが、地域医療に多大なる貢献をされ、2015年には叙勲受章されました。残された私達には多大なる損失ではありますが、永い間の御苦勞を「お疲れさまでした。ありがとうございました。」とご冥福を御祈り申し上げます。

て驚いたことがあります。昔、まだ天皇のような存在であった教授へ、年2回挨拶伺いが行われておりました。医師会病院医師派遣の継続を維持させるためでした。青木先生は、教授に対して、先輩のような屈託のない明け広げの大きな声で語りかけ、気難しい教授もその勢いに引き込まれるようでした。なんとも言えない、バイタリティーの塊のようでした。

思ったことは、即、大声でしゃべり出すので、誤解と非難を受けることがありましたが、それだけ天真爛漫、正直であったためと思われまます。

青木先生の医師会での主な業績を記します。

〔広報〕安房医師会での青木先生の初めての理事担当は広報でした。その時から安房医師会広報誌に対する思いは深く、亡くなる今年まで実に40年、編集委員を務めていたことは、驚嘆に値します。広報発行に執念を燃やしていたことが判ります。その間、内容が向上したことは勿論です。

また青木先生は、千葉大学医学部同窓会会報「ゐのはな」の編集委員でもあり、「千葉県のはな会誌」の編集にも携わっておりま

した。

〔安房医師会病院の運営〕続いて昭和59年、安房医師会病院管理部長に就任、経営が難しかった医師会病院の管理、経営を担当、当時、人事権を握っていた大学教授への人脈を生かして医員の充実を図りました。トックラスの医師が常勤医師となり、大学病院と直結、病院の質が飛躍的に向上いたしました。その頃が最も医師会病院が輝いていた時で、院内スタッフの他、医師会員を対象にした研究会、勉強会も盛んに行われました。

〔検診事業〕昭和63年から、地域医療担当になり広い人脈をいかした精度の高い医師会主導型の検診が繰り上げられるようになりました。当時、安房には11の市町村があり、昭和43年の胃検診より始まった検診は自治体と緊密な連携のもとに総合検診となり、年々受診者が増加、国の検診事業のモデルになるまで発展いたしました。そして、毎年、住民健診会議として、何人かの千葉大学教授、医師会の担当、11市町村の担当、保健所、結核予防会などが一堂に会し、検診の結果と今後の方針について検討されました。

大学教授がずらりと居並び意見を戦わせた当時の熱気を思い出しますと、体が熱くなるほどです。そのような会議を企画し、議長として進行させたのが青木先生でした。青木先生が最も輝いていたときです。更に、その検診の分析結果を青木先生は何回も関東農村医学会に報告し、そこで多くの業績から平成6年には関東農村医学会、平成13年から日本農村医学会の評議員に就任しております。

〔救急医療と新安房医師会病院開設〕当時安房地域の救急医療は不備であり、医師会病院に併設されていた「夜間急病診療所」で開業している会員が輪番制で細々と続けられておりました。真に救急治療が必要な重症は鴨川の亀田総合病院まで行く必要がありました。館山市を初め、安房の各自治体としてはなんと24時間対応の病院を求めておりました。昭和60年代から新しい医師会病院の建設が検討されておりましたが、膨大な資金を集めることが問題でした。そこで、365日、24時間対応の地域拠点病院を建設することを各自治体にアピール、資金の援助を得て完成に漕ぎ着けることが出来ました。その交渉の段階で人脈の広い、

青木先生の尽力が大きかったことは言うまでもありません。そして平成12年6月、念願の新医師会病院が完成、その開院式の晴れ舞台で青木先生は最高に輝いておりました。

〔表彰〕あまりにも沢山あります。最も大きいものは平成27年の「旭日双光章」です。保健衛生功勞として晴れやかに授与されました。その他、昭和58年の千葉県国民健康保険連合会表彰に始まり、千葉県知事表彰(平成4年)、千葉県医師会長表彰(平成14年)、千葉労働局長表彰(平成14年)、千葉県知事表彰(平成14年)、厚生労働大臣表彰(平成18年)、読売新聞社表彰(平成20年)、千葉県学校健康教育功勞者表彰(平成21年)などです。

そのような多くの功績に埋め尽くされたような青木先生ですが、私に対しては、ふと悩みを漏らすことがありました。最後にちらりと顔を合わせたとき、今度、ゆっくり酒を飲みながら聴いてもらいたいことがある」とわずかに寂しそうな訴えるような表情で語っていたのが、コロナ騒ぎで実現しないまま終わってしまったこと、申し訳なく心残りです。

明るく、何事にも、より良いものに築こうとするバイタリティーに溢れておりましたが、その明るい裏に何か、淋しさを感じることはありませんでした。自分を誰よりも頼りにしていた青木先生。安らかなご冥福をお祈りいたします。

同窓会員の逝去に際し、
弔文の掲載をご希望される
方は、同窓会本部へ原稿を
お送り下さい。

千葉県職員人事異動

- | | |
|---|--|
| <p>循環器病センター
中村 精岳(昭和60)</p> <p>病院長(副病院長)
杉森 邦夫(昭60)</p> <p>副病院長(医療局診療部長)
田永 幸正(平9)</p> <p>医療局診療部循環器科部長(主任医長)
藤沼 好克(平15)</p> <p>主任医長(君津中央病院脳神経内科部長)
佐原病院
三方林太郎(平11)</p> <p>医療局診療部内科部長(新採)
押田 成人(熊本大医・平14)</p> <p>主任医長(新採)
精神保健福祉センター
石川 真紀(平12)</p> <p>技監(次長)
千葉県職員より退職
星岡 明(昭58)</p> <p>病院局こども病院院長
岡嶋 良知(昭58)</p> <p>病院局循環器病センター
病院長
大野由記子(東北大・昭57)</p> <p>香取健康福祉センター長(兼)香取保健所長
古口 徳雄(昭60)</p> <p>病院局救急医療センター
副病院長
田中 武継(滋賀大・昭59)</p> <p>病院局佐原病院副病院長
石川 隆尉(昭56)</p> <p>病院局がんセンター医療局診療部長</p> | <p>がんセンター
山本 尚人(三重大・昭60)</p> <p>医療局診療部長(医療局診療部乳腺外科部長)
中村 力也</p> <p>医療局診療部乳腺外科部長(主任医長)
櫻井 利興(平18)</p> <p>主任医長(医長)
徳元 秀樹(金沢大)</p> <p>主任医長(医長)
救急医療センター
稲葉 晋(秋田大・平8)</p> <p>医療局長(医療局診療部麻酔科部長)
佐野 雅則(平7)</p> <p>医療局診療部循環器治療科部長(主任医長)
鈴木 浩二(札幌大・平9)</p> <p>医療局診療部神経系治療科部長(主任医長)
稲田 大悟(琉球大医)</p> <p>主任医長(医長)
稲田 梓(琉球大医)</p> <p>主任医長(医長)
こども病院
中島 弘道(昭58)</p> <p>病院長(副病院長)
皆川 真規(平元)</p> <p>副病院長(医療局長)
数川 逸郎(平15)</p> <p>医療局診療部長(医療局診療部内分泌科部長)
中田 光政(平12)</p> <p>主任医長(新採)</p> |
|---|--|

タッチパネル

川崎富作先生と

三島由紀夫・松本清張

都 川流花 (ペンネーム、同窓会員)

医学の教科書を開いて

みると人の名前を冠した病名が幾つも載っています。その中には日本人の名が付いたものもありま

すが、その分野の専門家以外の一般人で誰でも知っているものを挙げてみなさいと言われると即座には出てきません。

その中で誰でも知っているのが川崎病でしょう。新聞やテレビでこの病気の名前を一度も見たことがない人は少ないはず。

川崎病を最初に報告して独立した疾患として確立した、るのほな同窓会員の川崎富作先生に関しては、1例目の患者の発見から、その後欧米の教科書に病名が載って世界中に研究が広がるまでの多くのエピソードが様々な処に書かれています。三島由紀夫や松本清張との関わりについて知っている人は少ないで

んでした。私の手元には馬に乗ったお二人が並んで写っている写真があります。これは競技会の会場で撮影したのですが、鞍の上のつぶらさんはまだあどけなさが残る顔立ちです。

日本馬術振興会の乗馬教室は1年に1回遠乗り会を開催していて、三島由紀夫も馬に乗って家族と一緒に参加したことがあり、川崎先生ご自身も馬に乗りませんでした。遠乗り会の野外的な食事に参加されたこともあったそうです。

また川崎先生の幼い息子さんが持っている自転車を見て、三島由紀夫の息子の威一郎さんが、「ぼくもあれが欲しい」とネダリ、三島由紀夫がすぐに買ってあげたのだそうです。これは私がそれまで持っていた作家三島由紀夫のイメージとは全く別の、平凡な子煩悩な父親の顔を持つ三島由紀夫でした。

三島由紀夫が生まれたのは1925年1月14日、川崎先生の誕生は同年の2月7日ですから両者は1カ月も違わず、この2人は将に同年齢の父親でした。

昭和45年11月25日という日はあまりにも有名な事件

が起こった日なので記憶に

栗(しおり)が挟まれている方も居られるかも知れませんが、その朝から川崎富作先生の奥様と三島由紀夫の夫人瑤子さんは同じクラブの同じ場所で乗馬のレッスンを受けて居られました。

途中で、瑤子夫人が「主人と連絡がつかない」と言っただけですが、そのとき三島由紀夫は陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地(現在の防衛省市ヶ谷庁舎)に自らが主宰する楯の会のメンバー4名と乗り込み、自衛隊員達に向かつてバルコニーから「男

一匹が命を懸けて諸君に訴えている。聞け」と絞り出すような声で演説をしていたので。その場で聞いていた人はどう思っただろうか。かわかりませんが、それは

実際に命を懸けた演説でした。バルコニーから室内に戻った三島由紀夫はその場で割腹自殺しました。楯の会の25歳の森田必勝が介錯を務め、あらかじめ決めてあった作法通りに、腹を切ると同時に三島由紀夫の首を銘刀「関の孫六」で斬り

落とし、その三島由紀夫の遺体の脇で森田必勝も切腹して22歳の小賀正義が介錯してその首を斬り落とした。

三島由紀夫の検死を行ったのは千葉大学の医学進歩課程から慶應大学に進み、後に同大学の法医学教授を務めた柳田純一先生ですが、左から右へ真一文字に引かれた刃は腹部大動脈を見事に断ち切っていたそうです。

そのときの三島由紀夫の心には、いささかの躊躇いもなかったのでしょうか。つぶらさんはその日の夕方、学校から帰宅し、「紀子ちゃんのお父さんが大変なことになった」と母親から聞かされたのだそうです。その決行に先立って三島由紀夫は家族に何も告げていなかったのでしょうか。家族にさえ何の気配も悟られずにあれだけのことをし

たとは三島由紀夫というのは凄人です。しかし、当直していた日赤病院の夜間外来の片隅から世界の教科書にその名前を刻む病気を見つけた川崎富作先生はそれ以上に凄人だったと思います。

ところで、川崎先生は1989年度の朝日賞を受賞しています。そのとき文学部門でこの賞を受賞したのは松本清張です。受賞式のと川崎先生の家族全員で松本清張を囲んだ写真があります。この写真でも川崎先生の笑顔には磁石のように人を引き寄せる力が備わっているのがわかります。

三島由紀夫の検死を行ったのは千葉大学の医学進歩課程から慶應大学に進み、後に同大学の法医学教授を務めた柳田純一先生ですが、左から右へ真一文字に引かれた刃は腹部大動脈を見事に断ち切っていたそうです。そのときの三島由紀夫の心には、いささかの躊躇いもなかったのでしょうか。

つぶらさんはその日の夕方、学校から帰宅し、「紀子ちゃんのお父さんが大変なことになった」と母親から聞かされたのだそうです。その決行に先立って三島由紀夫は家族に何も告げていなかったのでしょうか。家族にさえ何の気配も悟られずにあれだけのことをし

たとは三島由紀夫というのは凄人です。しかし、当直していた日赤病院の夜間外来の片隅から世界の教科書にその名前を刻む病気を見つけた川崎富作先生はそれ以上に凄人だったと思います。

ところで、川崎先生は1989年度の朝日賞を受賞しています。そのとき文学部門でこの賞を受賞したのは松本清張です。受賞式のと川崎先生の家族全員で松本清張を囲んだ写真があります。この写真でも川崎先生の笑顔には磁石のように人を引き寄せる力が備わっているのがわかります。

三島由紀夫の検死を行ったのは千葉大学の医学進歩課程から慶應大学に進み、後に同大学の法医学教授を務めた柳田純一先生ですが、左から右へ真一文字に引かれた刃は腹部大動脈を見事に断ち切っていたそうです。そのときの三島由紀夫の心には、いささかの躊躇いもなかったのでしょうか。

つぶらさんはその日の夕方、学校から帰宅し、「紀子ちゃんのお父さんが大変なことになった」と母親から聞かされたのだそうです。その決行に先立って三島由紀夫は家族に何も告げていなかったのでしょうか。家族にさえ何の気配も悟られずにあれだけのことをし



医療従事者向け生命保険・損害保険のご利用は・・・
千葉大学るのほな同窓会「会員総合補償制度」担当

PIONEER 株式会社パイオニア

Tel.0475-23-8442 (営業時間 8:30-18:00)
【引受保険会社】東京海上日動火災保険株式会社



https://www.pioneerltd.com/

学内情報

るのほな同窓会支援

第15回

Basic and Clinical Research

Conferenceが開催されました

るのほな同窓会副会長

白澤

浩 (昭57)

令和4年2月3日に、るのほな記念講堂とZoomとのハイブリッド形式で第15回ちばBCRCが開催されました。ちばBCRCは、医学部生のリサーチマインドを涵養することを目的として、スカラシッププログラム(研究室配属)の成果を発表する場となっておりますが、学生の研究発表に加えて、研究室紹介、特別講演が有志の学生事務局長の手により運営・企画されています。

参加者は学生378名、教員・来賓等28名で、学生座長の司会で行われた学生発表は、研究内容の深さばかりでなく「どのように伝えるか」という面でも工夫されています。研究室紹介は、小児病態学濱田洋通教授、公衆衛生学尾内善広教授の講演でした。特にともにテーマとしている川崎病に関しては、臨床・基礎両面から掘り下げたお話を伺うことができました。

令和4年2月3日に、るのほな記念講堂とZoomとのハイブリッド形式で第15回ちばBCRCが開催されました。ちばBCRCは、医学部生のリサーチマインドを涵養することを目的として、スカラシッププログラム(研究室配属)の成果を発表する場となっておりますが、学生の研究発表に加えて、研究室紹介、特別講演が有志の学生事務局長の手により運営・企画されています。

参加者は学生378名、教員・来賓等28名で、学生座長の司会で行われた学生発表は、研究内容の深さばかりでなく「どの



松原久裕医学部長の講評スカラシップ賞・千葉医学奨励賞授与、吉原俊雄同窓会長からのるのほな同窓会長賞の表彰が続きしました。また、3年次のポスター発表の中からスカラシップ優秀ポスター賞が表彰されました。

第15回 ちばBCRC

最優秀賞を受賞して

医学部6年 古木直人



この度、第15回ちばBCRC (Basic & Clinical Research Conference)にて最優秀賞を賜りましたこと心から感謝申し上げます。同会では、「プロテオミクスによるMDM2が制御するフェロトシスの分子基盤の探索」について発表いたしました。

フェロトシスは、鉄依存的な過酸化脂質の蓄積によつて起こる細胞死現象であり、がん、神経変性疾患、虚血性疾患など様々な疾患病態に関与することが知られています。

この度、第15回ちばBCRC (Basic & Clinical Research Conference)にて最優秀賞を賜りましたこと心から感謝申し上げます。同会では、「プロテオミクスによるMDM2が制御するフェロトシスの分子基盤の探索」について発表いたしました。

フェロトシスは、鉄依存的な過酸化脂質の蓄積によつて起こる細胞死現象であり、がん、神経変性疾患、虚血性疾患など様々な疾患病態に関与することが知られています。

最後は徳久前学長の座長による、平野俊夫先生(国立研究開発法人量子科学技術開発機構理事)の特別講演でした。P10を発見されたことで著名な先生ですが、その多難な研究過程や研究への熱意は多くの学生の胸を打ちました。

医学部6年 古木直人

その制御機構に関して、共同研究者であるコロンビア大学の Carol Privet は、p53抑制分子であるMDM2が、がん細胞においてp53非依存的にフェロトシスを制御していることを報告しました。しかし、その詳細な制御機構は十分に解明されていません。

本研究では、その解明を目的としてノンターゲットプロテオミクスによる網羅的解析を行い、MDM2による脂質合成経路を介したCoQ10機能調節という新たなフェロトシス制御機構を報告しました。今後は、この機能に関わるMDM2の標的分子についてより詳細な解析を行うとともに、フェロトシスによるがんの病態メカニズム及び新規

治療戦略の可能性について検証していきます。

私はスカラシッププログラムでは分子病態解析学教室にて、抄読会・研究に参加し、論文の読み方から実験手法、実験データの解析方法など、様々なことを学ばせていただいております。先生方の研究に打ち込む熱心かつ真摯な姿勢にはまだまだ及びませんが、今後も医学研究の一端を担える一人前の研究者になれるよう努力する所存です。

この度のちばBCRCにつきましまして、開催にご尽力いただいた皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、同会の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

最後に本賞受賞にあたり、ご指導いただきました田中知明教授、横山真隆助教をはじめ分子病態解析学教室の先生方に深く感謝申し上げます。

第15回ちばBCRC

最優秀賞を受賞して

医学部5年 菊地創太



この度、第15回ちばBCRC (Basic & Clinical Research Conference)において最優秀賞を賜りました。日頃の研究活動に大きな評価をいただき大変嬉しく思います。また、新型コロナウイルス流行により例年とは異なる状況の中で同会開催にご尽力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

この度、第15回ちばBCRC (Basic & Clinical Research Conference)において最優秀賞を賜りました。日頃の研究活動に大きな評価をいただき大変嬉しく思います。また、新型コロナウイルス流行により例年とは異なる状況の中で同会開催にご尽力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

この度のちばBCRCにつきましまして、開催にご尽力いただいた皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、同会の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

最後に本賞受賞にあたり、ご指導いただきました田中知明教授、横山真隆助教をはじめ分子病態解析学教室の先生方に深く感謝申し上げます。

医学部5年 菊地創太

同会では「急性骨髄性白血病におけるヒストンメチル化酵素を介した新規転写機構の解明」について発表いたしました。急性骨髄性白血病の中でも予後不良な種類として知られるMLL再構成型急性骨髄性白血病ではヒストンメチル化酵素SETD1Aが白血病細胞の生存に必須なことが先行研究により分かっています。SETD1AはDNA修復関連遺伝子の転写活性に関与することが知られていましたが、その他の標的遺伝子や具体的な転写制御機構について詳細は不明でした。本

同会では「急性骨髄性白血病におけるヒストンメチル化酵素を介した新規転写機構の解明」について発表いたしました。急性骨髄性白血病の中でも予後不良な種類として知られるMLL再構成型急性骨髄性白血病ではヒストンメチル化酵素SETD1Aが白血病細胞の生存に必須なことが先行研究により分かっています。SETD1AはDNA修復関連遺伝子の転写活性に関与することが知られていましたが、その他の標的遺伝子や具体的な転写制御機構について詳細は不明でした。本

研究では薬剤により細胞内のSETD1Aを分解可能なモデルを用いて、遺伝子発現解析を行うことで標的遺伝子の同定を行い、エピゲノム修飾及びRNAポリメラーゼII修飾を解析することで転写制御機構の解明を行いました。

私は2年次より分子腫瘍学教室で研究や論文抄読会に参加させていただいており、今回のBCRCはその成果を発表する機会として大変有意義なものでした。日頃の活動では実験手技や解析手法のみならず、どのような視点で考えるか、あるいは如何にそれを人に伝えるかといった研究者としての思考も含んだ非常に充実した内容のご指導をいただいております。臨床医でも研究マインドが求められる昨今、このように基礎研究の最前線を体感し、多くのことを学べる機会を大切にしたいと考えます。今後とも研究活動を継続し、基礎と臨床という二つの視点を備えた医療者を目指していきたいと思っております。

最後に本賞受賞にあたり、金田篤志教授、星居孝之講師をはじめ分子腫瘍学教室の先生、スタッフの皆様方に心より感謝申し上げます。

医学部5年 菊地創太

同会では「急性骨髄性白血病におけるヒストンメチル化酵素を介した新規転写機構の解明」について発表いたしました。急性骨髄性白血病の中でも予後不良な種類として知られるMLL再構成型急性骨髄性白血病ではヒストンメチル化酵素SETD1Aが白血病細胞の生存に必須なことが先行研究により分かっています。SETD1AはDNA修復関連遺伝子の転写活性に関与することが知られていましたが、その他の標的遺伝子や具体的な転写制御機構について詳細は不明でした。本

同会では「急性骨髄性白血病におけるヒストンメチル化酵素を介した新規転写機構の解明」について発表いたしました。急性骨髄性白血病の中でも予後不良な種類として知られるMLL再構成型急性骨髄性白血病ではヒストンメチル化酵素SETD1Aが白血病細胞の生存に必須なことが先行研究により分かっています。SETD1AはDNA修復関連遺伝子の転写活性に関与することが知られていましたが、その他の標的遺伝子や具体的な転写制御機構について詳細は不明でした。本

あのはな同窓会支援 第12回 白衣式祝辞

あのはな同窓会長
吉原 俊雄 (昭53)

あのはな同窓会を代表して、白衣式に臨まれる学生の皆さんに一言お祝いを述べさせて頂きます。

白衣式は、これまで多くの先生方から基礎医学・臨床医学を学び身に着けた知識を活かして、病院の臨床実習に入る一つの大きな節目となります。病院における実際の診療活動を経験し、患者さんとも直接接する機会が始まります。つまり将来の優れた医師、研究者になるための助走期間とも言えます。本日は皆さんとご参集いただいたご家族の皆さんに、同窓会として現在進行している事業をご紹介したいと思っております。旧医学部棟(私たちの世代は旧病院)の歴史を振り返り、将来の発展の礎とするため、



【写真提供：スナップスナップ】

Zエスドキュメンタリー制作のディレクターと共に、旧病院を中心に医学部に関する資料収集、撮影が進められています。

旧病院の歴史の一日を述べますと、昭和11年竣工、12年に開業した旧病院は、部屋の数823であり、当時東洋一の病院とされました。世界的な軍縮の中、軍事費の一部が病院建設に回ったとも言われ、当時としては豪華な外国製ステンドグラスや種々の色彩のタイルが使用されています。学生時代は無意識に足を踏み入れていましたが、令和3年末の閉館となる時になって初めてその歴史的意義を認識しました。

さらに、竣工当時の新聞をひもとくと、見出しには

「千葉市の悪疫地獄」とあり、赤痢、腸チフス、ジフテリアなどの感染症に苦しめられていたと(この)、旧病院が千葉市、千葉県の治療の要となっていたことが容易に想像されます。

歴史的なこの建物は閉館となり、学生のみならず新しく建設された医学部棟でさらに学ぶ機会を得ます。新しい病院施設、すばらしいICU、放射線施設での実習も体験することになります。現在の状況は「悪疫地獄」と言えないかもしれませんが、新しい施設の完成と合わせCOVID-19(新型コロナウイルス)感染症という未曾有の感染症に見舞われたこと、まさに歴史は繰り返すということが実感します。

皆さんが研修生活に入

る、3年後には千葉大学医学部は開設150周年を迎えます。千葉医学 Chiba Medicine の伝統は「すぐれた臨床医の輩出」であり、そして優れた基礎医学系教室と臨床医学系教室の垣根を超えた協力により、臨床のレベルアップをしていのが本学の特徴です。旧病院のある教室には戦後米軍の医師、日本中、そして世界中から多くの手術見学者が訪れた歴史・記録写真が残っています。

皆さんも将来、臨床医、研究者、教育職あるいは医療行政に関わるすばらしい医師になることを願って、私のお祝いの言葉とさせて頂きます。頑張ってください。

第116回医師国家試験成績

試験日	令和4年2月5日(土)	6日(日)
合格発表	令和4年3月16日(水)	
受験者	124名(新卒者 117名)	
合格者	119名 合格率 96.7%	(新卒者 117名 合格率97.4%)
参考	国立	合格者 4,916名 合格率 92.2%
	全国	合格者 9,222名 合格率 91.7%



【写真提供：スナップスナップ】

ご住所・ご勤務先等に変更がございましたらあのはな同窓会にご一報ください。

電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail: info@inohana.jp

令和4年卒業生の卒業研修先


1年目	2年目	人数
成田赤十字病院	成田赤十字病院	12
成田赤十字病院	千葉大学医学部附属病院	1
松戸市立総合医療センター	松戸市立総合医療センター	9
松戸市立総合医療センター	千葉大学医学部附属病院	1
千葉ろうさい病院	千葉ろうさい病院	5
千葉ろうさい病院	千葉大学医学部附属病院	1
千葉市立青葉病院	千葉市立青葉病院	4
君津中央病院	君津中央病院	4
君津中央病院	千葉大学医学部附属病院	1
千葉医療センター	千葉医療センター	3
千葉医療センター	千葉大学医学部附属病院	1
船橋市立医療センター	船橋市立医療センター	3
千葉県済生会習志野病院	千葉県済生会習志野病院	3
静岡県立総合病院	静岡県立総合病院	3
さいたま赤十字病院	さいたま赤十字病院	2
船橋中央病院	千葉大学医学部附属病院	2
船橋中央病院	船橋中央病院	1
東京警察病院	東京警察病院	2
虎ノ門病院	虎ノ門病院	2
武蔵野赤十字病院	武蔵野赤十字病院	2
千葉中央メディカルセンター	千葉中央メディカルセンター	2
日本赤十字社医療センター	日本赤十字社医療センター	1
深谷赤十字病院	深谷赤十字病院	1
盛岡赤十字病院	盛岡赤十字病院	1
横浜市立みなと赤十字病院	横浜市立みなと赤十字病院	1
静岡済生会総合病院	静岡済生会総合病院	1
済生会横浜市東部病院	済生会横浜市東部病院	1
横浜労災病院	横浜労災病院	1
国保旭中央病院	千葉大学医学部附属病院	1
国保旭中央病院	国保旭中央病院	1
千葉大学医学部附属病院	千葉大学医学部附属病院	1

1年目	2年目	人数
東京大学医学部附属病院	東京大学医学部附属病院	1
杏林大学医学部附属病院	杏林大学医学部附属病院	1
国際医療福祉大学熱海病院	国際医療福祉大学熱海病院	1
東京歯科大学市川総合病院	東京歯科大学市川総合病院	1
東京女子医科大学東医療センター	東京女子医科大学東医療センター	1
東京都保健医療公社大久保病院	東京都保健医療公社大久保病院	1
東京都立墨東病院	千葉大学医学部附属病院	1
東京都立駒込病院	東京都立駒込病院	1
東京都健康長寿医療センター	東京都健康長寿医療センター	1
東京都立多摩総合医療センター	東京都立多摩総合医療センター	1
茨木県立中央病院	東京大学医学部附属病院	1
岐阜県立多治見病院	岐阜県立多治見病院	1
千葉県立病院群	千葉県立病院群	1
富山県立中央病院	富山県立中央病院	1
青梅市立総合病院	青梅市立総合病院	1
川崎市立井田病院	川崎市立井田病院	1
さいたま市立病院	さいたま市立病院	1
公立富岡総合病院	公立富岡総合病院	1
八戸市立市民病院	八戸市立市民病院	1
東京ベイ・浦安市川医療センター	東京ベイ・浦安市川医療センター	1
永寿総合病院	永寿総合病院	1
亀田総合病院	亀田総合病院	1
関東中央病院	関東中央病院	1
熊谷総合病院	千葉大学医学部附属病院	1
湘南鎌倉総合病院	湘南鎌倉総合病院	1
立川相互病院	立川相互病院	1
手稲溪仁会病院	手稲溪仁会病院	1
東京通信病院	水戸協同病院	1
水戸協同病院	横浜南共済病院	1
横浜南共済病院	東京通信病院	1

神奈川のはな会 令和4年 32号

みのはな・かながわ(令和4年3月18日)

みのはな かながわ



神奈川のはな会・千葉大学みのはな同窓会神奈川県支部

令和4年 32号

みのはな・かながわ(令和4年3月18日) 1

みのはな・かながわ 第32号 目次

巻頭言	神奈川みのはな会の唯一無二をめざして	西川哲男	2
総会	令和3年度総会開催報告	高山篤也	3
	令和3年度神奈川みのはな会庶務報告		5
	令和2年度決算報告・令和3年度予算案		5
	総会風景		6
新任挨拶	みのはな・かながわの一員としてよろしくお願いたします	加藤一喜	7
医学トピックス	一中核病院での新型コロナウイルス感染症とのたたかい	平澤 晃	9
	内分泌疾患領域に関わる最近の治療薬	齋藤 淳	15
身辺雑記	長きにわたり地域医療を見つめてきて		
	千葉大学第二外科神奈川同門会(はげみ会)の思い出	小柳朝明	18
	新型コロナウイルス感染症の自粛に思ったこと	烏田陽子	22
	(役に立たないコーナー)		
	お暇な方だけ、お立ち寄りください	三科孝夫	23
	オトコたちよ!	北野慎一郎	26
	山と仲間と糖尿病	松澤陽子	29
みのはな同窓会功労受賞報告		西川哲男	31
表紙の写真			33
計報			33
事務局より			33
作品募集			33
神奈川みのはな会会則			34
編集後記			35

題字・中村隆次/写真・小柳朝明

千葉県のはな会 令和4年3月 第22号

千葉県のはな会会誌

特集 旧病院の思い出



Vol. 22 No. 1 2022年(令和4年)3月号

表紙題字：井出源四郎氏

目次

巻頭言	秋葉 哲生 (S50)	1
Essay		
若手研究者のリリースessay	朝山加奈子 (H25)	2
60年前の会報	秋葉 哲生 (S50)	7
特集 「旧病院の思い出」		
千葉大学医学部日本館の閉鎖に思う	栗原 正和 (S54)	8
旧病院の思い出 ～卒業アルバムから～	三枝 一雄 (S32)	10
守るべき文化遺産 コールタワニの思い出	滝野 尚 (S38)	13
旧病院へのメッセージ	大川 昌雄 (S46)	14
私の「旧病院」の思い出	秋葉 哲生 (S50)	15
大地震があっても壊れない病院	中村 義人 (S54)	16
吉 城	小島 広成 (H3)	17
俳句		
露の秋	三枝かずを (S32)	19
柚子の街	神田たかし (S35)	19
報告		
第19回千葉大学卒業関係のご報告	浅野 祐介 (医学部3年)・梅澤 果那 (医学部3年)	20
令和3年度総会開催のご報告	高橋 安和 (H11)	21
令和4年度総会開催のご案内		22
2020(令和2)年度決算報告ならびに2021(令和3)年度予算案		23
2021年度 千葉県みのはな会年会費納入いただいた方		25
千葉県みのはな会会則		29
編集後記		30
投稿規定		30

表紙
「露の秋」
白龍園士 (H3)

同窓会員著書の紹介

野口 巖(昭9) 著

玉砕の硫黄島に生きた

混成第二旅団野戦病院

文芸社 定価 1500円(税別)

紹介者 野口 忠男(群馬大・昭41)



本書は私の父が昭和59年に自費出版したものです。戦後大分時が経りましたが、その後多くの方々から、貴重な記録だから埋もれさせるべきではないとお言葉を頂き、今回正式な出版をいたしました。父は昭和9年の卒業です。

硫黄島の野戦病院には千葉医科大学の卒業生が2名、その他1名が登場します。古い話ですが、読み物としても面白い点もあるかと思えます。よろしければ同窓の方々にご紹介願えればと思います。

序に代えて

野口 忠男

太平洋戦争の激戦地、硫黄島については、多数の書

においても、捕虜として扱われず、相手国の保護、援助のもとに傷病者の診療を続けることができる」という項目があります。万国赤十字条約によって、捕虜とならずに部隊が救われる道があるのではないかと考えたのです。

次に現に戦っている相手、米軍と交渉するという当時の日本軍では考えられない発想とその実行。これが成功し、部隊は全員自決という悲劇を避けることが出来ました。

このような絶体絶命という状況下でも、知恵と実行力で名誉を守りながら窮地を脱することが出来たのです。帝国陸軍史上でも稀な記録だと思われれます。

はしがき(著者)

戦争は、残酷なものだ。非人道的なものだ。誰もがそう考えている。

しかし、その非人道的な戦争の中にも、人道的な処置が考えられていることを、どれだけの人が知っているだろうか。

世界各国の間に、赤十字条約が結ばれていて、この条約こそ、人命の貴さを基本として、戦争中に必要以上の殺生が行なわれない様敵対行為をせぬ者(非戦闘

員)や、戦地に於ける傷病者の生命を出来る限り救う様に考えられている。

私は、玉砕の島、硫黄島の野戦病院の経験が、少しでも、諸賢に赤十字条約の存在意義を伝え、米軍の戦

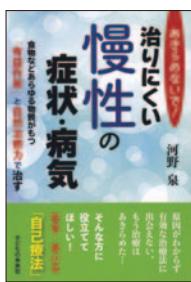
河野 泉(昭42) 著

あきらめないで!

治りにくい慢性の症状・病氣

子どもの未来社

定価 1600円(税別)



本書を書いた理由

1967年卒業、インタンの後千葉民医連の市川市民診療所に入職し、夜間診療の一部などを担当しながら3年間の小児科の研修を終えた時に、感染症以外では圧倒的に原因不明の病氣が多いことを改めて実感し、将来は僅かでも病

地に於いての人命尊重態度を知っていただければ、誠に幸いと思い、敢て、ペンを執った次第である。(混成第二旅団野戦病院 1~3頁より転載)

「ルギー」の先駆者アルバート・H・ローの論文で、原因不明の難治な患者すべてで、その原因が「食物」であると確定診断して、その原因除去で治していることを知った。間もなく勤務先で診断に困った時にローの方法に従うと、その報告の通りにその患者の原因が食物だということになった。

しばらくしてローの同僚・後継者でもあるセロン・G・ランドルフの論文で、微量な化学物質による食物汚染も原因として報告されていることを知った。これこそ自分が求めていた医学だと確信し、以来約50年間この「臨床環境医学」に携わることになり、多くの環境物質が病因になっていて、「アレルギー」が再発を繰り返す理由も同様と考えるに至る。

「Tomorrow is another day」映画「風と供に去りぬ」でスカレットが最後に云う有名な台詞である。なぜ、明日は明日の風が吹くのか? 本書では、その理由を合理的に説明し、「明日はどのような風が吹くのか判らない事」が人生の様々な問題の解決の鍵になる事を伝える。

学んだ「唯物弁証法」を思い出し、その基本命題から「すべての物質には『病因』にも『治癒力』にもなる力がある」ということに思い当たった。そしてその『治癒力』を取り出すことに成功し、多くの病氣の新しい予防的治療を実現できたと考えた。その方法が「転写治療水」であり、その実現に至るまでの試行錯誤の経験をまとめたのが本書である。

20年目を迎えた頃、大村恵昭氏発明の「オーリングテスト」を利用することになり、原因の診断が容易になったが、再発の反復は変わらず、再発を起こさない新たな治療法の開発が必要になった。

2018年に数年来の腰痛の悪化で4か月間の病休となり、それまでの経験を初めて腰を据えて見直す時間を得て、遇々学生時代に

橋本英明(昭45) 著

ジャンケンの法則

株式会社デュナミス



「Tomorrow is another day」映画「風と供に去りぬ」でスカレットが最後に云う有名な台詞である。なぜ、明日は明日の風が吹くのか? 本書では、その理由を合理的に説明し、「明日はどのような風が吹くのか判らない事」が人生の様々な問題の解決の鍵になる事を伝える。

この記事を書くきっかけは、「ピンピンコロリ」の相談が増えて来た事であった。著者はそのような希望に答えるべく、まず「現実世界」(現世)について検討を行った。我々の生は現世で営まれているからである。我々はこのような世界に棲んでいるのか? その解明には「俯瞰科学」という手法を用いた。これは「生命、社会、世界、自然、宇宙」といった大きなテーマを論じる場合には適切な総合科学である。

検証の範囲は拡大し、ピンピンコロリの検討↓生命

の起源→現実世界の本態→宇宙大自然の解明といったような過程を経て結局、現世の本体は「独自世界」であるという結論に至った。これは「自分が今、観ている瞬間の世界」である。

すなわち、現世は無常だがこの独自世界だけは実在すると見なす。

中国の漢詩に「前に故人を見ず、後ろに来者を見ず」と言う句がある。

昨日の出来事も明日の予定も全てが、「今現在」にしか現れない。

このような世界観に立つと、「一寸先」は闇である。すなわち「明日はどんな風

が吹くか誰にもわからない」、それは可も不可もない闇である。筆者はこれを「対象の闇」と命名した。万事が窮した場合でも、答えは必ずその闇の中に埋もれている。その対象には人世の様々な問題の鍵が隠れている。

その際、自分の強い意図、認識が成功に繋がる。これを「心想事成」という。治ろうと思っているものはもう半分治っている。(セネカ)

本書の目的は、「希望」という万能薬の処方伝授することである。

日本食品免疫学会編 食品免疫学事典

朝倉書店 12000円(税別)

下条 直樹(昭54)



最近の医学部での栄養についての授業がどのようになされているかは十分に知りませんが、近年、医学・医療における栄養学の重要性はどんどん増しているよ

を整理したものであり、日本を代表する生化学・食品科学・免疫学・医学の基礎・臨床研究者が執筆に参加しています。

全体の構成は10章からなっています。食の意味、各栄養素の概論(1章)から始まり、食を受け入れる臓器である消化管の構造と機能(2章)、基本的な免疫システムの解説(3章)、免疫が関連する代表的な疾患(4章)と進んでいきま

す。本書で特に興味深いのは5章で、近年非常に注目されている腸内細菌叢の基本的知識と疾患の関連に当てられています。腸内細菌は菌体由来の成分自身に免疫調節作用がありますが、腸内細菌によって産生される食品由来の代謝物が多様かつ重要な生体調節作用をもつことも近年明らかにされておられ、多くの臨床医にとつて必須の知識になってきたと言っても過言ではありません。6章、7章ではそれぞれ食品とその成分の免疫調節作用が解説されています。8章では食品の生体調節作用の評価方法を細胞レベル、個体レベル(動物モデル)、ヒト臨床試験まで紹介しています。9章では食品の免疫調節作用を、細胞レベル、ライフステー

ジ、代表的免疫疾患の別に解説しています。食品を購入する際に「機能性表示食品」のラベルを見ることが多いと思いますが、最後の10章は免疫調節機能を有する食品の社会的認知に関わる制度と課題についての解説となっています。

本書は「事典」であり、各項目が見開き1ページに

松永正訓(昭62) 著

ぼくとがんの7年

医学書院

定価 1980円(税込)



53歳という比較的若い年齢で膀胱がんに罹りました。このがんには、毎年およそ2万人が罹患し、そして約4千人が亡くなると言われています。私の場合は早期に発見されたため、主治医から90%治ると言われま

なっており、調べたい事物についての情報がコンパクトにまとめられています。ご縁あって私も著者に名前を連ねていますが、本書は広く多くの医療関係者にとつて役立つと信じています。価格の点から個人での購入が難しい場合でも各施設・職場に1冊置いていただければと存じます。

い」と思いました。これは半分冗談ですが、結果としてこうして本になりました。さて、膀胱がんは罹って何か得るものがあつたのかと言え、なんとも答えに窮します。「医師は患者になつて一人前」と先輩の医師から言われた経験があります。確かにそうかもしれませんが、やはり53歳でがんなどには罹るものではありません。

そういう経験を通じて、人間とは悩む生き物だと悟りました。私は闘病の過程でくり返し「死の悩み」に苛まれました。泌尿器科の医師から見ればオーバードと思うかもしれませんが、患者は文字通り必死になつて治療を受けます。

人というのは普段、前向きエネルギーで生きています。「いい仕事をしよう」とか「豊かな生活をしよう」とか、アクティビティが前向きです。ところがあるとき、病などの障壁にぶち当たってしまいます。そして悩みます。悩むと、その悩みをどうやって解決しようかと、いわば後ろ向きにエネルギーを消費するようになります。こうしたアクティビティは言ってみれば敗戦処理のようなもので、疲労する一方で何も生み出

膀胱がんの特徴は、時間的・空間(場所)的に多発することにあります。つまり何度も再発します。そし

て再発するたびに腫瘍が進展する可能性が高まります。粘膜内にとどまった膀胱がんは内視鏡的切除術で治療が完了しますが、わずか数ミリの粘膜を超えて筋層まで達すると膀胱全体の摘出術が必要になります。体の機能の一部を失うのは恐怖です。

実際、私は2回の再発を経験し、3回の摘出術を受けました。最初の再発では腫瘍は膀胱内の7カ所に及んでいました。治療の経過中、たびたび合併症に見舞われ、日常生活はもちろん仕事にも影響がでるような痛みの連続でした。あまりに痛みに「本にして元をとってやらなければ気が済まな

すことはありません。ところが後ろに向かつてじりじりと退いていくうちに、突き当たりにつつかります。悩みの限界点みたいなものでしょうか。精神的には開き直りの瞬間なのかもしれません。すると、悩むことに対して少し物ぐさになれます。発想を転換して、人間は「悩んで当たり前」と考えてみると、心の荷物がふつと軽くなります。頼れる人には頼って、悩みを人に放り投げてしまいうらいの気持ちになればいいなど感じました。

初発から7年が経ち、私も還暦を迎えました。残りの人生で今日が一番若い日ですので、もう少しがんばって医療と執筆をやりたいこうと思っています。なお、本書は、同級生の泌尿器科医、故・佐藤直秀先生に捧げる1冊です。同窓のみなさまも、ぜひお手にとつてみてください。

眼科教室同窓会
2021年 第58号



NPO小象の会 発行

コロナ禍の羅針盤

医療現場からの情報提供とアドバイス

篠宮 正樹 (昭50)



NPO法人生活習慣病防

止に取り組み市民と医療者の会(小象の会)では2005年の設立以来、糖尿病をはじめとする生活習慣病の発症や悪化を防止するための講演会、出前授業、広報誌発行、書籍の発行などに取り組んできました。新型コロナウイルス感染症のパンデミックに対しても、医療系NPOとして、最新かつ良質の情報を広く市民に発信・提供する必要がありますを感じしました。

折しも、このコロナ禍に関する市民の疑問や不安に応え、パンデミック下とその後とを見据えた指針となる記事が作りたいと、千葉日報社から要請を受けました。千葉県立保健医療大学・龍野一郎学長にご相談申し上げて企画・編集し、千葉県内で活躍する専門家先生方にご執筆戴けまし

た。執筆順に、河内文雄先生・寺嶋毅先生・伴俊明先生・松澤康雄先生・松本哲哉先生・中田孝明先生・白澤浩先生・岡田玲緒奈先生・森本浩司先生・猪狩英俊先生・竹本稔先生です。

記事は2021年10月21日から11月11日まで千葉日報紙上に15回にわたって連載されました。その内容をブックレット『コロナ禍の羅針盤―医療現場からの情報提供とアドバイス』として

発行、七千冊を作成しました。「感染症や肺の専門医の視点はもとより、生活習慣病や精神科、小児、救急医療など多様な角度から、著者ご自身の経験に即したわかりやすい言葉で、コロナに関する信頼できる情報が紹介されています。」(千葉大学医学部附属病院・横手幸太郎病院長による「推薦のことば」から)

千葉県医師会・千葉県薬剤師会・千葉県看護協会・千葉県栄養士会・千葉県臨床検査技師会などの千葉県内諸医療団体役員・医療系大学生、全ての千葉県立高

等学校・特別支援学校、全ての千葉県立小中学校・特別支援学校・公民館などに寄贈しました。県内市町村

欧州医学史巡り

モンペリエ

杉田 克生 (昭54)

フランス南部モンペリエは地中海から10kmほど離れており、薬の集散地として活発な活動をしていたのである。モンペリエ大学医学部は1220年ローマ教皇

ホノリウス3世の特使コンラード枢機卿により創設された。アラビア医学が自由に伝来したためか、医学は13世紀初めには教えられており、ヨーロッパではポロニーヤとならぶ医学教育先駆けの地である。モンペリエ大学医学部の建物の前身はサンピエール教会であり、14世紀のアビニオン幽囚の時にはベネディクト派に属した。百年戦争時代は治安が悪く外国からの学生がモンペリエに來れなかつたが、それだけ医学教育として当時から名をはせた大学である。

大学の正門入り口には、この大学出身者でナポレオン時代最後の医学部長である

の新型コロナウイルス感染症担当課および保健所に参考資料として寄贈しました。

ウン自体本来は聖職者が着ていたものであり、大学の由来が教会や修道院であるヨーロッパの歴史を現している。現在でも欧米では、大学の学位授与式や専門医資格授与式などで目にするガウンである。

医学部2階には解剖学博物館がある。館内はきちんと標本が展示されている。天井は教会さながら華麗な絵が描かれており、歴史を感じさせられる。展示品には今ではなかなかお目にかかれないワックスモデルやキュンストレーキ(紙製人体模型)に加え、病理標本や骨格標本が数多く展示されている。乾燥させた骨格モデルには筋肉が付着したものもあり、なまなましい。

るバルテスやペイロニーの像が据えられている(写真)。医学部の入り口を入ってすぐ左の扉を開けると、学部長室に通じる部屋がいくつかある。最初の部屋は以前司祭の居住区であったが、現在は更衣室となっており、ロッカーが設置されている。壁には多くの医学を教える教員の肖像画があるが、当時の学生には教員を知るための手段でもあった。

面白いのは、内科医と外科医の違いであり、diplomaをもたない外科医デファブローがただ一人、赤のガウンを着られないため黒のガウン姿で描かれている。ガ



写真 モンペリエ大学医学部正面

ヨーロッパではよく目にする胎児の奇形標本も多く展示されているが、先天性水頭症、シヤム双生児、無脳児など実物を医学生に見せるのは教育上効果的と思われる。ガイドの方の話では、当時講義を担当していたランケレチヌスが解剖の遺体を得るために学生を墓場に行かせて掘り起こさせ

雑文雑談

心臓の話

石出 猛史 (昭52)

心臓移植 ジョセフ・フェリオラは米国のイタリア系マフィアで最初に心臓移植を受けたと言われている。且てアル・カポネが率いたイリノイ州シカゴのアウトフィットと呼ばれるファミリーのドンである。1989年テキサス州ヒューストンの病院で、2度目の移植手術を受けて数週間後に亡くなった。病院の公式発表である。主治医は当時米国で心臓外科の指導的立場にあったベイラー大学々長のマイケル・ドベイクーであった。

米国のロックフェラー財閥の当主でチェース・マンハッタン銀行の会長を勤め、三極委員会の創設者でもあつ

たとのことである。フランス革命後、政府が衛生のための大学としてパリ、ストラスブール、モンペリエの3大学を認定したが、その一つであるモンペリエ大学医学部訪問をお勧めする。*本大学の詳細は、日本医事新報Z. 4534(2011年3月19日、110頁)を御一読願います。

たデイヴッド・ロックフェラーは2017年に101歳で亡くなるまでに6回の心臓移植を受けたと一部で報道された。疑わしい。しばしば世界陰謀説の標的となっていた人物である。1967年12月3日南アフリカの心臓外科医クリスチャン・バーナードが世界で最初にヒトからヒトへの心臓移植を行った。この患者は術後18日目に亡くなった。その2年後の1969年4月ヒューストンの病院で、世界初のヒトへの完全人工心臓の心臓置換手術が行われた。患者は術後に状態が悪化したために、64時間後にヒトの心臓移植手術を受けたがその3日後に亡

た。米国のロックフェラー財閥の当主でチェース・マンハッタン銀行の会長を勤め、三極委員会の創設者でもあつ

くだった。

管見した限りでは、1969年以降負荷検査を行って患者に移殖された心臓(ドナー心 除神経されて自律神経の影響がない)と残存している患者の心臓(レシピエント心)の機能を評価した論文が幾つかみられる。レシピエント心の評価は主に心電図のP波(心房波)によって行っている(レシピエントの心電図には2種類のP波がみられる)。

安静時のP波の頻度はレシピエント心よりもドナー心の方が有意に多かった。洞結節の自律神経支配が副交感優位であることを裏付ける所見であろう。中等度の運動負荷では、ドナー心の心拍数の増加は不良である。しかし心拍出量の増加は見られた。自律神経の切除により、内因性心臓機能intrinsic heart、即スターリングの法則が顕在化したためであろう。負荷検査は移殖から1~2年後に行われているので、この間生理学的に意味がある自律神経の再生は無いと考えてよいであろう。スターリングが行った一連の実験では蛙や亀の摘出心が用いられている。この実験記録は論文としては刊行されておらず、講演記録が残されているだ

けである。現在スターリングの法則は分子レベルで説明されている。最終的に移殖に不適格と判定されたドナー心を用いて、冠状動脈の交感神経性β₁・β₂受容体の分布を定量的に調べた論文がある。左冠状動脈と右冠状動脈とは受容体の分布と量に有意な差がみられる。冠攣縮性狭心症患者に対する選択的β₁受容体作動薬の冠状動脈拡張作用は、右冠状動脈に比べて左冠状動脈で明かに有効性が高い。受容体の分布度の差が、この拡張効果に寄与すると考えて、筆者は自験例と併せてこれを論文として報告した。

理の本を参照すると、ジギタリス抗体について1971年の犬を用いた実験の論文が引用されていた。印がついているので新米のころ調べてみる。内容についても全く記憶が無い。

このミステリーでは、心臓手術後定期的なジゴキシンを内服していた女性がジギタリス中毒を疑われる症状で亡くなった。しかし実際に用いられたのは夾竹桃であった。夾竹桃にはオレアンドリンというジゴキシンと同種の強心配糖体が含まれていて、ジギタリスと類似の症状を惹き起こす。スズラン、フクジュソウなどにも同様の強心配糖体が含まれていて、いずれの中毒にもジゴキシン抗体が有効であるという。

ストリーは加害者であるフィラデルフィアの上流階級の心臓外科医が、被害者の女性にバーベキューの串として夾竹桃の枝を使わせたというものである。1975年フランスで実際に、夾竹桃の枝をバーベキューの串に用いた男女7人が死亡するという事件が起こっている(「キョウチクトウ」Wikipedia)。1980年千葉県某の牧場で、飼料に混入した夾竹桃を食べた乳牛20頭が中毒を起こ

してうち9頭が死亡したという記述がみられる(「中毒百科」南江堂)。米国では1986年から、英国では1989年から、ジギタリス中毒に対するジゴキシン抗体の使用が許可されて標準治療になっていくということである。本邦では集中治療の領域から採用の要望が出されているようであるが、この原稿の執筆時点では「日本薬局方」の処方一覧には収載されていない。近年のヒトにおける夾竹桃による中毒の報告例は南アジアに多いようである。

訂正
雑文雑談(188号19面)
無宿民之助
3段目13行目
坪内信道↓坪井信道

モリアル事業費から本館撮影費の半額を支出し、医学部正面玄関ホールのレストラングラス清掃代に支出した事など説明され、承認された。

(2)「千葉性暴力被害支援センターちさと」への寄附
同センターの賛助会員となり毎年会費を支払う事が説明された。

(3)会報発行について
4月末に総会案内状を送り、総会開催後に総会号とした会報を発行するため、会報の発行は6月末、9月、1月とする事が提案され、承認された。

(4)会則改定について
吉原会長より資料に基づき顧問についての任期、大学院医学研究院長、病院長を特別顧問とする事を記載した会則が示され承認された。評議員については、名称から検討しクラス代表幹事など具体案を示し、今後検討する事とした。

講演の企画については学術・企画部の担当とし、臨時理事会等で今年中に決める事とした。旧本館についての講演は来年4月にDVD完成予定のため、多くの会員が視聴後、令和5年の講演が望ましい事が説明された。

講演の企画については学術・企画部の担当とし、臨時理事会等で今年中に決める事とした。旧本館についての講演は来年4月にDVD完成予定のため、多くの会員が視聴後、令和5年の講演が望ましい事が説明された。

講演の企画については学術・企画部の担当とし、臨時理事会等で今年中に決める事とした。旧本館についての講演は来年4月にDVD完成予定のため、多くの会員が視聴後、令和5年の講演が望ましい事が説明された。

講演の企画については学術・企画部の担当とし、臨時理事会等で今年中に決める事とした。旧本館についての講演は来年4月にDVD完成予定のため、多くの会員が視聴後、令和5年の講演が望ましい事が説明された。

講演の企画については学術・企画部の担当とし、臨時理事会等で今年中に決める事とした。旧本館についての講演は来年4月にDVD完成予定のため、多くの会員が視聴後、令和5年の講演が望ましい事が説明された。

令和3年度 第2回理事会議事要旨
(Zoom利用によるWeb会議)
日時:令和3年11月18日
(木) 18時より
出席者:
吉原俊雄(会長)
栗原正利(副会長)
中村真人(副会長)
白澤 浩(副会長)
大井利夫(参与)
吉川廣和(参与)
伊藤達雄(参与)
赤倉功一郎 安西尚彦
石川昭雄 井上賢治
上田真喜子 岡本和久
劍持 敬 齊藤光江
諏訪園靖 高橋宏和
田邊政裕 鶴田好孝
十川康弘 中島 透
西川哲男 幡野雅彦
林田和也 ピアス洋子
菱木知郎 松前孝幸
三澤園子 宮本恒彦

横須賀忠 (敬称略)
吉原俊雄会長が座長となり議事が進められた。
議題
1. 報告事項
(1) 予算執行状況(中間報告)
幡野雅彦理事より資料に基づき予算中間報告があり、収入について会費等は例年同様であり、名簿広告知料は名簿作製時初回精算後の残金が入金されたこと。支出については総会費がオンラインサポート代などで予算額を超えたこと、支部活性化事業費は5支部に助成したこと、学生活動助成金は亥鼻祭に支援したこと、メ

モリアル事業費から本館撮影費の半額を支出し、医学部正面玄関ホールのレストラングラス清掃代に支出した事など説明され、承認された。

講演の企画については学術・企画部の担当とし、臨時理事会等で今年中に決める事とした。旧本館についての講演は来年4月にDVD完成予定のため、多くの会員が視聴後、令和5年の講演が望ましい事が説明された。

館前に十分な撮影を行う事ができ、エントランスホールでの座談会など順調に進んでおり、最近発見できた古い資料等の撮影を来年2月に予定している事が報告された。

(7) 会報合本について

会報の合本は、これまでに3回ほど行っているが規定がなかったため、今後はある程度(約5年間)の厚さで100部ほど作製し、理事、各支部長などに配布する事が承認された。

(8) その他

同窓会報発送時に千葉大学基金室からの寄附依頼を同封する事が承認された。

3. その他

(1) 同窓会館の現状の問題点と今後の維持について

同窓会館のメンテナンスなど今後、検討を続けていく課題であり、設計者の鈴木弘樹氏にメンテナンスの具体策を示すように要望している事が説明された。

(2) 旧病院の新たに発見された古い資料の保管について

千葉大学施設環境部三好氏、新倉ディレクター、栗原副会長により旧本館書庫から旧本館建設当時の議事録、戦争中に軍に供出した金属類のリスト、銅像の供

出記録や領収書などの貴重な資料が発見された事が説明された。

明された。それらは廃棄予定のため同窓会で保管する事が承認され、今後、電子化も検討する事とした。旧本館内にあったトロフィーの保管についても同窓会で

令和3年度 第3回理事会議事要旨
(Zoom利用によるWeb会議)

日時：令和4年2月16日
(水) 18時より

出席者…

吉原俊雄(会長)
栗原正利(副会長)
白澤 浩(副会長)

秋葉哲生(会計監事)
大井利夫(参与)
吉川廣和(参与)

伊藤達雄(参与)
赤倉功一郎 安西尚彦
石川詔雄 井上賢治

上田真喜子 岡本和久
黒木春郎 剣持 敬
諏訪敏一 諏訪園靖

高橋宏和 田邊政裕
鶴田好孝 十川康弘
中島 透 西川哲男

幡野雅彦 林田和也
ピアス洋子 菱木知郎
星野 聡 松前孝幸

三澤園子 三科孝夫
宮本恒彦 横須賀忠

(敬称略)

吉原俊雄会長の挨拶の後、長い間にわたり理事を務め

保管する事とした。本館撮影の際に中山恒明先生の手術器具を栃木県の社会医療法人中山会宇都宮記念病院よりお借りして撮影した。

られた青木謹氏(昭36)が逝去された事が報告された。同会長が議長となり議事が進められた。

議題

1. 報告事項

(1) 予算執行状況
幡野雅彦理事より資料に基づき会計について、収入は会費等が昨年同時期より多いが納入率は下がっていること、会員ご遺族よりの寄附があったこと、支出については、総会費は予算を

超えたが、理事会、委員会費はWGC会議開催により支出が抑えられていること、白式式助成は予算を超えたこと、支部活性化事業費は7支部に助成したことなどが説明され、承認された。

(2) その他
吉原会長からちばBCRCに出席し学生の発表や質疑応答が大変素晴らしかったことが報告され、学生時

代だけでなく医師になってから成長著しい人も多く、今後の可能性、期待について学生に伝えた事が話された。

いて、総会費を増額、理事会費、委員会費は減額した事、留学生交流支援費は留学生交流会再開予定のため予算に計上する事とした事などが説明され、承認された。

2. 協議事項

(1) 令和4年度行事予定

安西尚彦理事より資料に基づき、昨年度と同様に、5月に総会開催案内を送付し、会報を6月(総会報告)、9月、1月に発行する予定であり、理事会は4月、11月、2月の開催であること等が説明され、承認された。

(2) 令和4年度総会について

吉原会長より資料に基づき、総会講演会について、るのはな同窓会特別顧問に就任される松原久裕医学研究院長、横手幸太郎附属病院長にご挨拶をいただき、

南野徹氏(平元)、黒川友哉氏(平23)、ちばBCRC受賞者 矢田部沙羅氏(医学部5年)3名に講演いただく事とし、この案が承認された。総会については会報

等との同封でなく案内状だけを送り、総会式次第、カラー刷りの講演会案内状を同封し、参加者を増やすようにしたいと説明された。

(3) 令和4年度予算編成について
幡野理事より資料に基づき令和4年度予算編成につ

いて、総会費を増額、理事会費、委員会費は減額した事、留学生交流支援費は留学生交流会再開予定のため予算に計上する事とした事などが説明され、承認された。

回廊の壁面に歴史を掲載する案が資金的な面で実現できなかつたため、それに代わりHPに歴史編纂年表を掲載する事になった経緯が説明された。1874年共立病院から2021年12月まで記載し、各講座の変遷や業績についても記載していること、多くの人にいつでも見てもらえるようにと

(4) メモリアル事業(本館撮影、歴史編纂年表)

栗原正利副会長より本館撮影については、11月本館閉鎖直前まで撮影を行っており、2月に外観の撮影などに入り4月初旬に完成予定である事が説明された。完成したDVDのケース装丁について検討した結果、ブック型のものという意見が多く、その方向を進めていく事とした。DVD作製には問題ないが、ストーリーミングは版權、著作権の問題があり難しい事が説明された。DVDの映像は30分

程でナレーションは草刈正雄氏に依頼し、5分ほどのプロモーションビデオをHPに掲載する予定であるがナレーションは、他の人になる。アーカイブとして残す映像についても90分程のものが保存される予定である。ナレーションに大学建設当時の経緯を入れる予定である事が説明された。

田邊政裕理事より同窓会館関連施設設立事業からメモリアル事業に継続し、同窓会館から通路につながる

回廊の壁面に歴史を掲載する案が資金的な面で実現できなかつたため、それに代わりHPに歴史編纂年表を掲載する事になった経緯が説明された。1874年共立病院から2021年12月まで記載し、各講座の変遷や業績についても記載していること、多くの人にいつでも見てもらえるようにと

考えており、今後も定期的な新たな情報を追加していく予定である事が完成した歴史編纂年表を示しながら説明された。

(5) 評議員名称変更について

吉原会長より資料に基づき評議員の名称を実質的な学年幹事とする案が提案された。以前に評議員についてはクラス代表幹事という位置づけで役職継続あるいは辞退のアンケートをとり活性化を図ったが返信のなかった場合などの対応が不十分だったこともあり、検討を続けている。評議員の名称変更については、様々な意見があり、位置づけをはっきりし現評議員の気持ち配慮して慎重に進めていく事とした。

令和4年度第1回理事会議事要旨抜粋
(Zoom利用によるWeb会議)

日時：令和4年4月21日
(木) 18時より

出席者…

吉原俊雄(会長)
栗原正利(副会長)
白澤 浩(副会長)

秋葉哲生(会計監事)
大井利夫(参与)

吉川廣和(参与)
赤倉功一郎 安西尚彦
石川詔雄 井上賢治

上田真喜子 黒木春郎
齊藤光江 諏訪敏一
諏訪園靖 高橋宏和

田邊政裕 鶴田好孝
十川康弘 中島 透

(敬称略)

吉原会長より資料に基づき評議員の名称を実質的な学年幹事とする案が提案された。以前に評議員についてはクラス代表幹事という位置づけで役職継続あるいは辞退のアンケートをとり活性化を図ったが返信のなかった場合などの対応が不十分だったこともあり、検討を続けている。評議員の名称変更については、様々な意見があり、位置づけをはっきりし現評議員の気持ち配慮して慎重に進めていく事とした。

令和4年度第1回理事会議事要旨抜粋
(Zoom利用によるWeb会議)

日時：令和4年4月21日
(木) 18時より

出席者…

吉原俊雄(会長)
栗原正利(副会長)
白澤 浩(副会長)

秋葉哲生(会計監事)
大井利夫(参与)

吉川廣和(参与)
赤倉功一郎 安西尚彦
石川詔雄 井上賢治

上田真喜子 黒木春郎
齊藤光江 諏訪敏一
諏訪園靖 高橋宏和

田邊政裕 鶴田好孝
十川康弘 中島 透

(敬称略)

1. 報告事項

(1) 広報編集関係
千葉大みらい医療基金の寄附案内を6月発送の会報に同封する事が説明され承

り協議が進められた。

認された。

2. 協議事項

(1) 名譽会員の推薦について

吉原会長より資料に基づき、千葉県のはな会より千葉次郎氏、王伯銘氏、東京のはな会より吉原俊雄氏、大学のはな会より白澤浩氏が推薦された旨の説明があり、候補者の推薦基準を満たしているとして4名を名譽会員に推挙することが承認された。

(2) 令和3年度決算

① 決算報告

幡野雅彦理事より資料に基づき令和3年度の決算報告があり、収入については会費収入が昨年度比で多少の増加、個人からの寄附があり、支出は総会費がハイブリッド開催、開催案内費用のため予算を超え、理事会費、委員会費はWeb開催のため減額、白衣式助成はDVD制作製代が2年度分となったため予算額を超えたこと、同窓会館設備準備金に300万円を積立てたことなどが説明され、承認された。

② 監査報告

秋葉哲生会計監事より、令和3年度の会計監査を実施したところ適正であることが報告され、岩倉弘毅会計監事からも報告が届いている事が説明された。

(3) 令和4年度事業計画について

安西尚彦理事より、資料に基づき令和4年度の事業計画の説明があり、承認された。

(4) 旧本館記録DVDについて

医学部旧本館記録DVDのプロモーションビデオ(5分間)を視聴した。

(5) 旧本館の保存について

栗原正利副会長より資料に基づき旧本館撮影についての経過報告がされた。本編30分の予定が古文書の発見など豊富な内容が収まりきらず50分とした。寄附の返礼とするDVDは1口3,000円とする事が承認された。対象は会員に限定しない。版權は同窓会が持つており、追加発注も可能である。また、古文書の選別保管についても今後、検討する事とした。

(6) ホームカミングデイについて

田邊政裕理事より資料に基づきホームカミングデイ本来の目的について説明があり卒業生と大学、同窓会との関係強化である事、卒業50年、25年の卒業生を同窓会館に招待し、感謝状、記念メダルの授与などを行う事が提案され、承認された。

(7) 令和4年度予算案

幡野理事より資料に基づき令和4年度の予算について、ほぼ前年度の予算を踏襲しており収入については、会費収入は実績に見合った金額とし、支出については、総会費を増額、理事会費、委員会費は減額したこと、留学生交流支援費を計上したこと、メモリアル事業の予算を昨年同様500万円とした事が説明され、承認された。

(8) 会則改定について

吉原会長より資料に基づき新たに特別顧問を加え、評議員を学年幹事と名称変更した事などが説明され、承認された。

(9) 令和4年度役員について

吉原会長より資料に基づき役員について令和4年度は継続し、評議員には学年幹事と名称変更し継続の意思を確認し、半数以上から快諾を得ている事が説明され承認された。

(10) りのはな同窓会賞選考結果

安西理事より資料に基づき、社会貢献賞の候補者について説明があり、選考委員会から推薦のあった大川玲子氏が承認された。

(11) 総会について

吉原会長から資料に基づき総会案内について説明があり、講演会についてはチラシを作成して参加者が多くなるように考慮している事が話された。

(12) 同窓会館の維持、管理について

田邊理事より資料に基づきりのはな同窓会館の改修計画表が示された。医学部の管理に委ねられているものであるが、築後9年を経て修繕などが必要になっており、同窓会としてもサポート体制を考慮し同窓会館の維持、管理を援助していき修繕基金の積立など検討する事などが提案され、承認された。

会則 新旧対照表

旧	新
第9条 本会に次の役員をおく。 会長1名・副会長3名・参与3名・理事40名以内・評議員130名以内・監事2名	第9条 本会に次の役員をおく。 会長1名・副会長3名・参与3名・理事40名以内・監事2名・ 学年幹事
第16条 評議員は理事会の推薦に基づき総会の承認により選出する。評議員は会の重要事項について会長の諮問に応じる。	第16条 学年幹事は各学年より1、2名 選出する。 学年幹事 は会の重要事項について会長の諮問に応じる。
第20条 本会に顧問若干名をおくことができる。会長がこれを推薦する。顧問は会長の諮問に応ずる。	第20条 会長がこれを推薦し 理事会の承認を得る 。顧問は会長の諮問に応ずる。 顧問の任期は2年とする。但し再任を妨げない。
第21条 会議を分けて次の5種とする。 1. 通常総会 2. 臨時総会 3. 評議員会 4. 理事会 5. 総務会	第21条 千葉大学大学院医学研究院長、附属病院長をりのはな同窓会特別顧問とし、諮問に応ずる。任期は当該役職の任期の期間とする。(追加) 第22条 会議を分けて次の5種とする。 1. 通常総会 2. 臨時総会 3. 理事会 4. 総務会 5. 学年幹事会
第26条 評議員会は理事会において必要と認められたほか、評議員10名以上の要求によって臨時にこれを開くことができる。評議員会は、その決議により、会の臨時事業を発議提案することができる。	第27条 学年幹事会 は理事会において必要と認められたほか、 学年幹事 10名以上の要求によって臨時にこれを開くことができる。 学年幹事会 は、その決議により、会の臨時事業を発議提案することができる。
第27条 理事会は原則として年三回開催し、過半数の出席をもって会の成立とする。但し委任状をもって出席に代えることができる。理事会は、会務全般につき随時報告を求め、第24条に規定する事項の外、会の重要事項について審議し決定する。この議決事項については速やかに会報に掲載する。千葉大学医学部長、千葉大学医学部附属病院長は理事会に出席し意見をのべる事ができる。但し議決には加わらない。(削除)	第28条 理事会は原則として年三回開催し、過半数の出席をもって会の成立とする。但し委任状をもって出席に代えることができる。理事会は、会務全般につき随時報告を求め、第24条に規定する事項の外、会の重要事項について審議し決定する。この議決事項については速やかに会報に掲載する。
第28条 本会の会務は総務会がこれを統轄する。 担当部：総務部、財務部、広報部、学術・企画部、渉外部、会報・編集部、評議員担当部、学生担当部、医学部・病院担当部、その他理事会において必要と認められた会務。 会務内容の詳細は別表2に定める。	第29条 本会の会務は総務会がこれを統轄する。 担当部：総務部、財務部、広報部、学術・企画部、渉外部、会報・編集部、 学年幹事 担当部、学生担当部、医学部・病院担当部、その他理事会において必要と認められた会務。 会務内容の詳細は別表2に定める。
別表2 ・評議員担当部 (評議員への通達、評議員会)	別表2 ・ 学年幹事 担当部 (学年幹事 への通達、 学年幹事会)

令和4年度 るのほな同窓会総会議事要旨

日時：令和4年6月11日 (土) 15時より

場所：ステーションコン

フランス東京にて

ハイブリッド開催

出席者：142名(会場38名、オンライン104名)

委任状：671名

吉原俊雄会長の司会により開会となり、まず物故者83名に黙祷を捧げた。吉原会長の挨拶の後、議事が進められた。

議事

(1) 名誉会員の推薦

安西尚彦理事より、内規に基づき推荐された4名の会員について説明があり承認された(10面に掲載)。(2) 年次活動(報告事項)

① 庶務部報告

安西理事より、令和3年度の各会議開催が報告された。

② 事業部報告

同理事より、同窓会賞の授与、同窓会報の発行、同窓サポートプロジェクト、各種助成、メモリアル事業について報告された。

(3) 令和3年度決算

① 決算報告

白澤浩副会長より決算内

容について報告があり、収入は会費収入が昨年度より増加、個人からの寄付もあつた。支出は総会費がハイブリッド開催、開催案内送付費用により予算を超えた一方、理事会費、委員会費はVMO開催で減額となったこと、白衣式助成はDVD製作代が2年分となり予算額を超えたこと、同窓会館設備準備金(メモリアル事業)に300万円を積み立てたことなどが説明され承認された。なお、決算報告作成にあたっては景山税務会計事務所の指導を受けている。

(4) 令和4年度事業計画

安西理事より、令和4年度事業計画の説明があり、承認された。田邊政裕理事より、るのほな同窓会館改修について、歴史年表HP掲載、ホームカミングデイ(11月20日)の開催予定などが説明された。

(5) 令和4年度予算案

白澤副会長より令和4年

度の予算案はほぼ前年度の予算を踏襲しており、収入については、会費収入は実績に見合った金額とし、支出については総会費を増額、理事会費と委員会費は減額、留学生交流支援費を計上し、メモリアル事業を昨年同様500万円としたことについて説明され、承認された。

(6) 会則改定について

吉原会長より新たに特別顧問を加え、評議員を学年幹事と名称変更したことなどが説明され、承認された。(7) 令和4年度役員について

理事については、会則第13条に則り、千葉大学のはな会より新たに選出された理事、伊藤彰一氏(平10)が承認された。

② 監査報告

岩倉弘毅会計監事、秋葉哲生会計監事より令和3年度の会計監査を実施したところ適正であることが報告された。

(4) 令和4年度事業計画

安西理事より、令和4年

度の事業計画の説明があり、承認された。田邊政裕理事より、るのほな同窓会館改修について、歴史年表HP掲載、ホームカミングデイ(11月20日)の開催予定などが説明された。

きたいとの提案があつた。吉原会長の辞により閉会となつた。

るのほな同窓会賞伝達式

伊藤達雄参与の司会により、社会貢献賞受賞者大川玲子氏の略歴等が紹介され表彰式が行われた。伊藤参与より表彰盾と副賞が授与された。

るのほな同窓会賞受賞者挨拶

社会貢献賞受賞者大川玲子氏が挨拶された。特別顧問就任に寄せて

座長吉原会長の紹介で、

松原久裕千葉大学大学院医学研究院長・医学部長と横手幸太郎千葉大学医学部附属病院院長が挨拶された。特別講演

座長吉原会長の紹介で、「老化細胞を標的とした抗老化治療の開発」と題して

南野徹氏による特別講演が行われた。

若手スピーチ

座長中村真人副会長の紹介で、「千葉大学行政での経験から何を還元するか」と題して黒川友哉氏による

若手スピーチ

座長白澤副会長の紹介で、

「線維芽細胞由来液性因子によるシンドビスウィルス

の腫瘍融解抑制」と題して矢田部沙羅氏による学生スピーチが行われた。

令和4年度予算

Table with 2 columns: 款項目, 予算額(円)

令和3年度決算報告

Table with 4 columns: 款項目, 予算額(円), 決算額(円), 対予算額(円)

注1~4: 収入、支出の主要細目等

Table with 4 columns: 収入の部, 支出の部, 令和4年度予算, 令和3年度予算

令和4年度 千葉大学医師会 日本医師会認定産業医研修会 基礎（後期・実地）・生涯（更新・実地）開催のご案内

標記研修会を下記の通り開催いたしますのでご参加下さいますようご案内申し上げます。

本研修会は日本医師会認定産業医制度における認定産業医になるための研修及び更新を希望する医師の研修です。

1. 主催：千葉大学医師会
2. 日時：令和4年11月16日（水）18時～20時
3. 場所：千葉大学医学部・医学系総合研究棟3階
第3講義室
千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学亥鼻キャンパス内
JR千葉駅東口
7番バス乗り場から京成バスを利用15分、
「千葉大医学部・薬学部入口」下車 徒歩1分
※ご来場の際は公共の交通機関をご利用願います。



医学系総合研究棟

4. 定員：50名
5. 受講料：千葉大学医師会員 無料、非会員：2,000円（当日、現金にてお支払ください）
6. 申込方法：Googleフォームよりお申込みください。
申込URL：<https://forms.gle/FASQjPAVXSYkTpW29>
※フォームからのお申込みが難しい場合は、下記事務局まで
お電話にてご連絡ください。



7. 申込期限：令和4年10月28日（金） ***定員に達しない場合は期日以降も受付いたします。**

8. 研修内容：基礎（後期1単位・実地1単位）又は生涯（更新1単位・実地1単位） 申請中

「最近の労働衛生行政について」「作業環境測定実習」

千葉大学大学院医学研究院	環境労働衛生学	教授	諏訪園	靖
	同	講師	能川	和浩
	同	助教	渡邊	由芙蓉

※生涯教育講座のCC：6. 医療制度と法律 1単位、11. 予防と保健 1単位が取得可能

※定員になり次第締め切ります。

※受講票は発行しませんが、申込み受付後、事務局よりメール等により受付連絡をいたします。

※受講シールは当日研修会終了後に手交いたします。

※新型コロナウイルス感染症の発生状況によって、延期または中止になる可能性がございます。

※不織布マスクの着用等、感染対策にご協力頂きますようお願いいたします。

申込・問合せ：千葉大学医師会 事務局

〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1 千葉大学医学部・ゐのほな同窓会事務室内

Tel：043-202-3755 Fax：043-202-3757 e-mail：ishikai@c-med.org

藤福小古渡小朝安中中伊福船明神小田小吉大佐佐
本富山川辺林岡生島神藤島曳石山笠中林岡津藤藤
久虎裕築富威久 義 壽一 竜 準宏 匡五
茂之信生一久親郎顕男進俊甫也郎雄光三三饒司郎

(昭昭札昭昭昭昭昭昭新専専専専昭昭昭日昭
3232幌3130302928262626新濁25252424242323本和医専・昭10
医大・昭31) 大専・昭25) 大専・昭20) 大専・昭10)

鈴宗澤渡本大林古白菊大小道米山下栗青野山吉星
木 邊橋槻 山濱池塚林口澤崎島原木口本松野

啓永國絵郁俊雅信龍義明俊 照修隆正 成 邦
司元夫里代夫意明興公彦憲博夫道生明謹力元彰夫

(平平平昭東昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
8 6元63京4844434141413938373636363635343333
医大・昭57)

おくやみ

みのはな同窓会費 口座振替ご利用の先生方へ

同窓会会費納入に口座振替をご利用いただき厚くお礼申し上げます。

さて、令和4年度同窓会費5,000円をご指定口座より7月20日に振り替えさせていただきます。

今後とも同窓会活動にご理解ご協力をお願い申し上げます。

千葉医学98巻1号 2022年2月

原著
当院における小児異物誤飲の現状について
飯島雄太 佐藤純一 甲斐千明 竹本直輝 齊藤裕子 力石浩志
木谷 豊 伊賀裕子 坂井美穂 丹羽淳子

症例
左胸腔鏡アプローチにてNo. 112aoPリンパ節を摘出した、
進行食道癌の1例
黒崎剛史 星野 敢 桑山直樹 郡司 久 外岡 亨
早田浩明 滝口伸浩 鍋谷圭宏 高山 亘

千葉医学会奨励賞
プロテインキナーゼCの活性化はヒトL型アミノ酸
トランスポーター2の機能を向上させる 森尾花恵

学会
第1433回千葉医学会例会・千葉大学大学院医学研究院消化器内科学
(旧第一内科) 例会
第14回ちばBasic & Clinical Research Conference 学生発表抄録
山口 淳

編集後記
Chiba Medical Journal
Chiba Medical Society Young Investigator Award Minireview
Epigenetic contribution to tumorigenesis of host cells by
Epstein-Barr virus infection
Takahiro Fujii, Atsushi Okabe, and Atsushi Kaneda

千葉医学98巻2号 2022年4月

原著短報
入院管理を行った新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の
小児39例の特徴
奥田裕也 吉田未識 大川哲平 森山陽子 加藤いづみ 杉田恵美
阿部克昭 高田展行 立野 滋 金澤正樹 寺井 勝

話題
医学用語語源対話 Ⅷ 杉田克生 池田黎太郎
千葉医学会奨励賞
特発性肺線維症に関する病態モデルとトランスクリプトーム解析
松田周一

学会
第1452回千葉医学会例会・第39回脳神経内科学教室例会
諏訪園 靖

編集後記
Chiba Medical Journal
Original Article
A novel suture method for radial tears of the lateral meniscus-biomechanical
analysis of the resultant force and tibiofemoral relationship
Hiroaki Hosokawa, Chenxu Huang, Hiromichi Fujie, Yuki Shiko
Shotaro Watanabe, Manato Horii, Masashi Shinohara
Yukio Mikami, Kaoru Toguchi, Seiji Kimura
Ryuichiro Akagi, Satoshi Yamaguchi
Seiji Ohtori, and Takahisa Sasho
第99回千葉医学会総会開催のご案内

編集後記

令和4年も新年度を迎え、そのご挨拶とともに第189号同窓会報をお送り致します。本号にも各方面で同窓会員のご活躍の様子が満載され、心強い限りです。巻頭には、みのはな同窓会総会開催の案内が掲載されています。また「千葉大学医学部旧本館・85年の記憶」DVDが完成しました。「千葉医学の伝統が刻まれ、多くの生と死を見届けてきた旧病院「旧本館」が1年以上の歳月をかけてつくられた記録であり、同窓会員の皆様と共有できたらと願うところ。さらに千葉大学や他大学に教授就任された先生方や退任される先生方のご挨拶も数多く、諸先生方の今後更なるご活躍

が期待されます。なお「研修プログラム」、「追悼」、「学内情報」、「同窓会員著書紹介」など記事満載の同窓会報の中に、「医学部歴史年表を作成して」と題して田邊政裕先生が寄稿されており、今後の学内情報に飛躍的に向上させた中山外科の話や、馬杉腎炎で名を残した馬杉復三教授の略歴などを知ることができました。私の記憶では医学部の講義室に馬杉先生他千葉大学医学部で名だたる先生方の肖像画が飾られていたと思うのですが、具体的にどこであったか想起できないのが残念です。欧州の諸大学では医学史担当教員を配置している所もあり、今

回も「欧州医学史巡り」と題して各地の医学史関連施設などを拙文にまとめ紹介させていただきます。日本国内でもいくつかの医学部では医学史展示施設を保有しており、今後本学にも「まず始めること、始めたら止めないこと」を体現された先達の業績を一覧できる展示室が設置されることを期待します。新型コロナウイルス感染症の収束が未だ見えない現状ではありますが、今年度もみのはな同窓会の皆様にとりまして良い1年となりますよう心よりお祈り申し上げます。
杉田克生 (昭54)